



暑中お見舞い申し上げます

公益財団法人 会 長	藤 縄 祐 爾
理 事 長	先 崎 一
常務理事	増 田 好 平
常務理事	吉 川 榮 治
常務理事	片 岡 晴 彦
常務執行役 (総務担当)	久 納 雄 二
事務局 長	植 木 美 知 男
公益財団法人 会 長	偕 行 社
相 談 役	志 摩 篤
理 事 長	富 澤 暉
副 理 事 長	森 勉
副 理 事 長	深 山 明 敏
副 理 事 長	熊 谷 猛
副 理 事 長	白 石 一 郎
専 務 理 事	奥 村 快 也
事 務 局 長	若 木 利 博

公益財団法人 会 長	水 交 会	東郷神社
副 会 長	齊 藤 隆	宮 司
理 事 長	吉 川 榮 治	東郷会
専 務 理 事	赤 星 慶 治	名譽会長
事 務 局 長	杉 本 正 彦	会 長
航空自衛隊退職者団体 つばさ会	長 谷 川 洋	副 会 長 兼 理 事 長
会 長	外 薊 健 一 朗	編 集 長
副 会 長	片 岡 晴 彦	事 務 局 長
副 会 長	溝 口 博 伸	公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
副 会 長	戸 田 眞 一 郎	会 長
副 会 長	片 山 隆 仁	理 事 長
専 務 理 事	若 林 秀 男	副 理 事 長
公益財団法人 大東亜戦争全戦没者 慰霊団体協議会	島 村 宜 伸	専 務 理 事
会 長	島 村 宜 伸	事 務 局 長
理 事 長	柚 木 文 夫	公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
専 務 理 事	圓 藤 晴 喜	会 長
常 務 理 事	伊 藤 隆	理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長
		編 集 長
		事 務 局 長
		公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
		会 長
		理 事 長
		副 理 事 長
		専 務 理 事
		事 務 局 長
		東郷会
		名譽会長
		会 長
		副 会 長 兼 理 事 長

巻頭言



「時空を超えて！」  
平成30年6月23日

理事長 藤田 幸生

特攻隊戦没者の慰霊顕彰活動に参加するようになって、十数年が過ぎた。

今までに、CD「あゝ特攻」、勇士の像建立等、数多くの事業に携わってきた。その中の一つに「森丘哲四郎手記」の発刊がある。

ご縁があつて、この手記に出会い、解説、校正作業に従事し、内容を何度も熟読してきた。大学ノート9冊にわたる日誌である。昭和17年7月14日から、昭和20年4月3日までの間の心の記録である。

散華されたのは、昭和20年4月29日であり、最後の約3週間は、空白である。この全期間の日誌を読みながら、「哲四郎」の心の動きを追った。

気持ちの浮き沈み、想いや悩みが、良く伝わってきた。自分自身と比較してみて、感じたことがある。それは、「人には誰でも、時の流れに沿った、心の浮き沈みがある。」ということであつた。

気持ちが、安定しているとき、不安定なとき、高揚しているとき、悩んでいるときなど、その時の気持ちが良くわかる。農業に対する夢や好意を寄せる女性のこと等、他に類を見ないほど赤裸々で、正直な記録である。

今、私達後世の人が、「特攻」を観るとき、「そのどの時点に、焦点を当てて観るか」は、その観る人の性格、見識によつて見方が異なってくる。それは、「自分そのもの」であろう。

数千人に及ぶ、陸海軍の各種特攻隊戦没者には、各人各様の人の生き方が、あつたと思われる。そして、各人に、高揚期と、沈静落胆期があつたようである。それやこれや含めて、この日誌は、特

攻隊戦没者諸霊の多面的な、正直な姿のひとつであろうと思われる。

彼らの一面のみを捉えて、賞賛したり、批判したりすべきではないと思われる。ましてや、当事者ではない、同世代でもない私達以下の世代が、軽々しく、評論すべきでは無く、それは出来ないことであると思われるのである。ただ、「感謝と、弔意と、我が決意」あるのみである！

人は、物を一面からのみ観てはならない。ましてや、生身の人間は、心身ともに変化が大きく、悩みも多い。それが、真実の姿ではなからうか？

そう考えると、賞賛も、批判も、正しいかも知れない。「時空を超える」とは、このことを理解することだと、思われて仕方がない。

(以上)



「大宗匠の鷹の目」

会長 杉山 蕃

平成三十年四月二十九日昭和節の良き日、世田谷山観音寺に於いて挙行された裏千家第十五代家元千玄室大宗匠の特攻隊全戦没者に対する献茶の儀は、天が与え給うた絶好の日和の中、凜然たる空気に包まれ、敬度の氣溢れる風情で、見事に行われた。九五歳になられた今もお、無き戦友の菩提を務め続けられている御誠意に心から尊敬の念を奉ずるとともに深甚なる感謝の意を表するものである。

千玄室氏は、読者のご存じのとおり、千利休十五代が孫、前裏千家家元として我が国文化の重要な一角を担う「茶道」を、そ



の中核として支え続けてこられた方でその功績は偉大である。一方で氏は、先の大戦で学徒出陣された海軍第14期予備士官であり、操縦士官であった。そして昭和20年夏には、特別攻撃隊員として発令され、鹿児島県串良基地へ前進、特攻出撃命令を待つ日々を送られ、終戦を迎えられたと言う特異な経歴を持つておられる。特に特攻を熱望された経緯は、「水戸黄門」役で名を馳せられた俳優西村晃氏との関係が有名である。予備学生同期の西村氏とは寢食・苦勞を共



同期生と 右端の西村晃氏と肩を組む千玄室大宗匠

にした仲間であるが、既に妻子のあった西村氏が「千ちゃん一緒に死んでくれるなら、俺も希望する」と覚悟を決め、二人「熱望」に○をして提出した逸話を明らかにしておられる。この逸話のように、特攻隊員として発令された方々は「絶対死」と言う大前提の下、異常な精神的高騰を経験し、かつこれを超越した数少ない人々で、これからの社会では有り得ない葛藤の体験者であると言える。

今まで機会がなく千玄室氏とは今回初めてお会いしたが、その若さに圧倒された。氏は大正生まれ、95歳と承知していたが、その年齢から想起するイメージは見事に覆される。寸毫も衰えを感じさせない肢体、物腰・・・茶道を支え続けてこられた家元としての風格が満ち溢れている。世田谷山観音寺中庭で、自ら演じられた茶道の神髄。在京の高弟の見守る中、豪快な振る舞いの所作は「茶の湯は武士のたしなみ」を感じさせる素晴らしいものであった。

我々が通常接するお茶会は、女性が点てられる事が多く、優雅な雰囲気の特徴である。筆者も若き頃、たしなんだ師匠は女性であった。比して大宗匠の醸し出される雰囲気の違いは深く心に残り、道の深さを思い知らせてくれるものであった。

大宗匠のもう一つの特徴はその眼の素晴

らしきである。招待された戦友「森丘哲四郎」大尉の妹君に接する慈愛のまなざし、我々におどけて「海軍式敬礼」をされた時のおどけた目、素晴らしいものがあるが、点てたお茶を捧げて特攻観音像へ進む目の厳しさは、まさしく「鷹の目」。先に見つけなければ「喰われる」と言う飛行機乗りの世界で鍛え抜かれた「鷹の目」を今に持ち続けておられる事に深く感銘したところである。今まで「鷹の目」を持った先輩は、多数存じ上げている。源田さん、黒江さんそして、自ら操縦の手ほどきを頂いた「ノモンハンの英雄」西原五郎さん等々、いづれも高名の方々であるが、僅か二年間の操縦経験でこの目を持たれたことに改めて感動を覚える。

功成り、名遂げた95歳の大宗匠が、大変なご多忙の中、生き残った元特攻隊員として戦没した戦友に慰霊の誠を捧げ続けておられる後ろ姿に深い敬意を抱くと共に、何を語り継ごうとしておられるのか、後に次ぐ我々は、夫々肝に銘じて慰霊顕彰の事業を継承していかねばならないと痛感する。

今回は、千玄室さんへの感謝と、特攻隊戦没者を追悼む気持を一つにさせて頂く事を以て一筆と致したい。

裏千家千玄室大宗匠による  
「特攻隊全戦没者に対する献茶の儀」

理事長 藤田 幸生

平成三十年四月二十九日、裏千家千玄室 大宗匠（以下「大宗匠」という）により、世田谷山観音寺において、旧陸海軍特攻隊全戦没者に対する献茶の儀が、執り行われました。  
（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会は、この行事を主になつて執り行ないました。

大宗匠は、幼名「千正興」と言われ、先の戦いにおいては、同志社大学から海軍予備学生第十四期生として学徒出陣されました。その後、飛行機乗りとして訓練を受け、特攻隊員に指名されていきました。戦後俳優になった「西村 晃」さんは、同期生だったそうです。

この日は、七十三年前、午後、朝鮮半島の元山基地から鹿屋基地経由出撃された、海軍第十四期予備学生同期であった特攻隊第五七生隊「森丘哲四郎」海軍大尉の命日でした。入隊後、舞鶴海兵団に入り、水兵服と一緒に撮った分隊写真が残っています。大の仲良しであったようです。「哲四郎」が残された全9冊の大学ノート日記には、「千」の名前が、よ

く出てきます。良きライバルでもあったようです。

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会は、この9冊の日記を原文のまま一冊に印刷し、「森丘哲四郎手記」として出版しています。大宗匠には、これにも投稿して頂きました。

その命日に、同期生であった大宗匠のご支援で実現した、今回の献茶の儀でした。海上自衛隊鹿屋航空基地史料館には、哲四郎が出撃前に飲んだというお茶碗が、遺品として飾られています。意義深いものです。京都から、哲四郎の御遺族の実妹「名和まさ多」様とお嬢様が、参列してくれていました。鹿屋慰霊塔前で、遺品で点てた献茶以来の再会でありましょう。

本献茶の儀は、当日大宗匠が、とてもお忙しいスケジュールの中、山梨からお出になつての実現でした。百二十人以上の参会者総員が、裏千家が京都から直接持参されたお菓子とお茶を頂きました。京都から千家ご一門のお弟子さん達、十人以上が出向いて来られての茶会は、世田谷山観音寺創立以来のことでありましたでしょう。献茶の儀は、大宗匠直々に、陸・海軍別々の特攻観音像に、二椀点てて捧げら



れました。白い袱紗が使われ、心の籠った  
献茶でした。



お点前をされる千玄室大宗匠

九十五歳とも思えない挙措動作は、諸所  
に海軍武人の仕来りが感じられました。

この日は、五月連休の二日目で、風薫る  
青葉の境内、穏やかな献茶に相応しい晴天  
でした。大宗匠のお気持ちが、御霊に通じ、  
御守りいただいていることが実感されまし  
た。京都の高弟の皆さんにより振舞われた  
参会者総員へのお茶菓子とお抹茶は、忘れ

られない味わいでした。

菊の御紋を戴いている特攻観音堂の中  
には、御遺族の名和様から献じられた、京都  
の名酒が、お供えされていました。



特攻観音像に献茶される大宗匠

献茶の儀の後、大宗匠からお心の籠った  
お言葉がありました。

出撃前の翼の下で、出撃隊員から所望され  
て一服を点てながら、「もし生きて帰って  
きたら、また千のお茶を飲ませてくれ！」  
と言われたということも・・・！  
そのお約束が、この日の献茶の儀であつた  
のかもかもしれません。



ご挨拶をされる大宗匠

私からも一言、参会者の皆様は、次のよ  
うなお礼を申し上げます。

『本日は、元特攻隊員の千正興海軍中尉、  
現裏千家大宗匠千玄室さまのご奉仕を頂き、  
ここ世田谷山観音寺の陸海軍「特攻観音堂」  
の前で、好天の下、厳かな献茶の儀が催行  
できましたことに感謝申し上げます。

ご英霊も、戦友による心の籠った献茶に、  
さぞや安らかなお気持ちになり、お慶びに  
なっておられることと存じます。

本献茶式実現に当たり、ご尽力いただき  
ました多くの関係者の皆様に、厚く御礼申  
し上げます。ありがとうございました。



堀田会員によるトランペット奉納演奏

私達は、今日を一つの節目として、今後とも、全ての特攻隊員の御霊に対して「ありがとうございます、どうか安らかに」と祈り、「世界平和のために努力します」と改めてお誓い申し上げたいと思います。

最後に、元自衛隊音楽隊トランペット奏者堀田会員による「鎮魂同期の桜」を捧げて、挨拶を終わらせて頂きます。」

(・・・トランペット演奏 「鎮魂同期の桜」・・・)

青葉の境内に、朗々と流れる素晴らしいラッパ演奏に、大宗匠以下参会者一同、大感激でした。

献茶の儀の後の、大宗匠の境内・会場内における立ち居振る舞いは、「特攻隊生き残りの隊員としての今までの戦友慰霊総決算だ」というお気持ち、諸所に感じられる巡回でした。ご遺族、ご来賓、一般参会者、全ての人達への労り、お礼、感謝、世田谷山観音寺の老山主へのいたわりとお礼に始まり、わが(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰会の奉仕者、ご奉仕されているお弟子さんへの労りまで・・・お一人お一人への、ご挨拶、声掛け、握手、共に写真撮影等、



来場者と交歓される大宗匠



来場者と記念撮影

五月晴れの青空の下、素晴らしい献茶の儀でした。

茶道の真髄を見せて頂いたような気がしました。

特攻隊員の御霊も、さぞや御悦びであつたであろうと思われます。見上げた若葉の間から観得る青空高くに、南から渡ってきたであろうと思われる「渡り蝶」が、舞っていました！

館山に帰宅して、興奮冷めやらぬまま、海岸散歩に出ました。



連休の海辺には、たくさん車の車や人が溢れ、青空の下で、シャボン玉を飛ばすなどして、遊び楽しんでいました。薄桃色の浜屋顔、黄色の月見草の花など、花々も咲き乱れていました。穏やかに風いだ海に、夕日が沈もうとしたとき、富士山の陰が、霧の中から浮かびあがってきました。この平和な国の姿も、特攻隊で亡くなられた御霊のお陰だと、しみじみと感じられ、生涯忘れられない、充実した一日となりました。

合掌！



当日ご参列頂いた森丘哲四郎海軍大尉ご遺族

豫科練雄飛会慰霊祭(最終回)に参加して

理事 水町 博勝

予科練雄飛会として最後となります。とご案内を頂き、会員のご高齢等とはいえ、会員の方にとって戦前から戦後の予科練に万感の思いでおられると推察した。

五日前、当頭彰会の第三十九回特攻隊全戦没者慰霊祭が靖國神社で執り行われ、満開の桜が花吹雪の状態であったが、四月四日には僅かな散り花も最終回の趣であった。参列者は八十名程。

○ 慰霊祭

拝殿での慰霊祭典は国歌斉唱、神官の奏上等、小林和夫豫科練雄飛会会長の祭文奏上は、戦後六十年間に鎮魂の記念像建立・雄翔館の整備など行い活動を本日で終え、御霊の慰霊は母体の会「海原会」に継ぐことを、万感込めて奏上され、胸打つものがあった。「海行かば」献歌の後本殿昇殿

○ 靖國會館前で記念写真撮影

○ 招魂観桜祭(直会) 靖國會館借行の間

会場の前面に音楽演奏のスカイマスターズ十二名のバンド、指揮者は「なごり雪」の歌手イルカさんの父上保坂俊雄雄飛会副会長が指揮をとり、BGMで迎えてくれました。

演奏するスカイマスターズ



来賓は海原会副理事長酒井氏始め海原会の方、世田谷山観音寺から太田恵淳和尚、太田賢照・当会評議員、の十名で極めて慰霊の身内の方ばかりでした。

会長の挨拶で始まりましたが「雄飛会」の活動停止が断腸の思いかを語っていました。ここで会長の言われる「雄飛会」に触れます。昭和8年7月予科練第一期生が課程を終え、実施部隊赴任の日17日をもって、



(9) 第121号

初代教育部長市丸少佐命名により「雄飛会」が誕生しました。(市丸少佐は海軍航空の草分けの一人、航空部隊指揮官の多くを勤め、硫黄島の航空戦隊司令官に着任、中将に、硫黄島で戦死された。)

「雄飛会」は終戦により活動を一時中断したが、在京の生存同窓により昭和38年「予科練雄飛会」を再建しました。会は84年間の長き活動ですが、後続のない組織の運命をたどるしかなく、会を終了せざるを得なかったのです。

これを予期して雄飛会(乙飛出身)を軸として丙飛会、甲飛会、特別乙飛会の予科練四会が一つになり立ち上げた「公益財団法人海原会」が主催する土浦での慰霊祭参加により同窓戦没者の慰霊を継承することとしました。

演奏メンバーに上方漫才ベテラン「おぼん・こぼん」の「こぼん」さんが、メンバーを紹介されました。

バンドは美空ひばりさんのバック演奏を務めたメンバーを主体にしている、構成はサクソ3名、トランペット3名、トロンボーンは自分を含め3名、余興に象の鳴き声と新幹線通過の音をトロンボーンの一吹きで演奏し、芸の深さを見せた。

スチールギター・ピアノ・ドラム各一名

司会をされる「こぼん」さん



をユウモアたっぷりに解説、さすがプロの技でした。

最期に海軍大尉の軍装のお似合いの保坂指揮者の演奏で軍歌演習「若鷲の歌」「艦船勤務」「同期の桜」を合唱し、最後の別れとしました。

完



開聞岳上空(北西から)



余興の一吹き

第42回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭  
列報告

理事 大穂 園井

平成30年4月6日(金) 10時半から宮崎県都城市内の都島公園内にある都城特別攻撃隊戦没者慰霊碑前(旧陸軍墓地内)で執り行われた「第42回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭」に顕彰会の理事兼事務局長石井光政氏と共に参列したので報告する。

都城陸軍基地からは米軍が沖繩に上陸直後の昭和20年4月6日から沖繩戦終結後の7月1日までの間に、東と西の飛行場から特別攻撃隊員79名と、それを援護するため飛び立った隊員のうち64名の計143名が戦死された。その大半は20歳以下の少年であった。日本で初めての四式戦特別攻撃機「疾風(はやて)」が使用されたのもこの基地からである。

毎年、第1陣が出撃した4月6日に合わせて慰霊祭が催され今年で42回目を迎えた。今回は慰霊祭前日に新燃岳が噴火し、かつ当日の急激な天候の変化で火山灰を含んだ大雨が降りしきる中にもかかわらず142名の方が参列。裏千家淡交会宮崎支部都城部会の和装のご婦人方からお茶とお菓子がふるまわれ、和やかな雰囲気でした。

祭文奏上では池田宜永都城市長が「多くの犠牲と遺族の深い悲しみを繰り返さぬよ



慰霊祭会場

う、平和への誓いを受け継ぎたい」と述べられた。祭壇に供えられた白菊が殊の外映える中、都城地区陸士第57期生会代表 神宮司淳様より追悼の辞が述べられた。

献茶の儀、献花と続き、都城市議会議長榎木智幸様が来賓として挨拶された。錦城会様の吟詠は松尾青雨作「吊特攻勇士(とつこうゆうしをとむろう)」。一句を献ずれば天空漠々行雲空し」と結ばれた。戦友である元隊員の方々の献歌「同期の桜」では、参列者も力強く唱和した。

都城市立山田中学校2年大石紗世さん(13才)は知覧の特攻平和会館に向いた



特攻隊戦没者慰霊顕彰会からの花輪

際の衝撃を語り、友人たちと千羽鶴を折り御霊をお慰めした事、「戦争や平和に目を向け自分にできることを見つけろ」と平和へのメッセージを読み上げた。紗世さんからは祭壇に折り鶴が供えられた。

伯父を亡くされたご遺族代表、愛知県豊田市の中村尚範さん(65才)は、穏やかな祖母がこの日は伯父の遺影を抱いて吠えるような声を上げ慟哭していた姿が忘れられないと語り「この悲惨な戦争を二度と起こしてはならない」と訴えた。

参列されたご遺族や元隊員の方々は、高



年齢であつたが、壮健な方々の姿も多数見受けられた。大荒れの天候にも関わらず参加者も多く、厳肅かつ心の温まる慰霊祭であつた。これも都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会（会長 都城市長）の方々のご努力のためものと感銘を受け、ここから飛び立ち祖国の為に散華された英霊の皆さま方の心安らかならんことをお祈り申し上げた次第である。



都城市立山田中学校2年大石紗世さん

旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式に参加して

副理事長 岩崎 茂  
評議員 秋山 政隆

今年も4月7日（土）に鹿屋市小塚公園慰霊塔前広場で「旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式」が例年どおり執り行われた。雲が多く風も強くやや肌寒い中、厳肅に整斉と執り行われた。

まずは主催者である中西鹿屋市長が式辞を述べられ、その後市議会議長、ご遺族と生存者の代表者、そして海自第1航空群司令の中村将補の4名の方々が追悼の言葉



儀仗隊弔銃

を述べられ、献花、儀仗隊弔銃と続いた。この追悼式には多くの特攻隊員のご同期の方々、そして全国各地からのご遺族の方々が多くご参集されて行われた。参加されたご同期とご遺族の数の多さにはやや驚きを感じましたが、鹿屋飛行場から飛び立った特攻隊員の数を考えれば当然の事かも知れません。追悼式の中で「平和メッセージの朗読」があり、昨年の小学生部門で最優秀に輝いたメッセージをご本人（追悼式当日は中学生）が朗読された。「海軍タルトの復活」の事が紹介され、特攻隊員に対する思いが述べられました。大変感動的な



岩崎副理事長献花



作品であり、胸を打つ企画であった。

一昨年前、参加させて頂いた山口県周南市での回天の追悼式には市や島民のご努力により中高校生が参加していた。戦後七十有余年が経過し、各地での特攻隊慰霊行事に参加される特攻のご同期の方々、そしてご遺族も年々減少傾向にある中、特攻隊員の御遺志を如何に後世に、次世代に伝えるか難しい局面を迎えている。鹿屋市の追悼式は市が主催者であり、近隣に海自航空部隊も所在しており、慰霊行事は今後も変わりなく続けられるものと確信しますが、各地での慰霊行事や私達の様な慰霊顕彰会等の活動をどう若い世代に伝えるか真剣に考える時期に来ていると再認識させられた。

しかし、最近是我々の様な活動に若い世代でも意外と関心をお持ちの方々も少なくはないと感じている。寧ろ、この様な活動をしている我々の方が、若い世代は関心がないものと勝手に決めつけ、若い人達に宣伝することを遠慮しているのかも知れません。これまで以上に積極的なPRや活動が必要と感じる今日この頃である。我々、慰霊顕彰会の役員も当然ですが、会員の方々の益々ご努力をお願いする次第です。

(岩崎 茂記)

徳之島の第51回戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊祭に参列して

理事 小倉 利之  
評議員 及川 昌彦

一 概要

平成30年4月7日(土) 慰霊塔がある鹿児島県徳之島伊仙町犬田布岬で、第2艦隊の関係者を交え約100名が参列した。

当日は朝は早くから北西の風が強くなり、荒れ、慰霊祭ができるのか心配したが、強風のために、塩気の含んだ飛沫が式場に降りそそぐなかでも神式にもとづき、式は済々と行われた。遺族代表者とし、2名のご挨拶があった。軽巡洋艦「矢矧」の操舵長だった内村範三郎さんの御子息内村武人氏、大和の弾薬庫担当だった月本元一さんの実弟月本陽蔵氏、氏は「多くの尊い命を失って得た現代の日本の平和に感謝し、戦争のない世界平和を切望する誓いのシンボルとなることを願う」と述べ慰霊祭と慰霊塔を守り続けている町当局など実行委員会に感謝を示した。

大久保町長は慰霊のことで「祖国日本の発展は、御霊の尊い犠牲の上に築かれた。恒久平和のための慰霊祭を継続いたします」とも表明。関係機関と・団体代表らの玉串奉納に続き参列者全員で白菊の花を献花した。

町役場が中心となって運営された素晴らしい慰霊祭であった。(及川 昌彦記)

二 所見

戦艦大和(72、809トン)を旗艦とする旧日本海軍第2艦隊の計10隻は太平洋戦争末期の1945年(昭和20年)4月6日、沖繩の米軍に対する海上特攻「天一(菊水)作戦」で山口県徳山港沖を出撃鹿児島県の西南西を南下中の7日午後、米軍機動部隊の波状攻撃を受け、大和をはじめ軽巡洋艦・駆逐艦など計6隻が沈没。乗組員・将兵合わせ3737人が犠牲となりました。

鹿児島には、2カ所に戦艦大和の慰霊碑があります。一つは、徳之島(犬田布岬)にあり、もう一つは、枕崎市の火の神平和祈念展望台にあります。

戦艦大和は、北緯30度22分、東経128度04分、長崎県男女群島女島南方17.6km(鹿児島県枕崎市の西南約200km)の水深345mの地点に沈没しています。

戦後長い間、徳之島の犬田布岬沖が戦艦大和の沈没位置と考えられてきました。(サンフランシスコ講和条約後に出版された『戦艦大和の最後』では徳之島200哩の洋上とされています。(1哩(カイリ)は1852m)

徳之島に南西部、東シナ海に向かって三角形に突き出ている犬田布岬は、琉球石灰岩の海蝕崖と鋭く切り立つ断崖が雄々し

い景観を見せる徳之島の景勝地です。その岬の、高麗芝が青々と自生したならかなスロープの先端に、合掌する人間の手をかたどった高さ24mの慰霊塔が西方沖を向いて建てられています。全国的な募金によって1968年(昭和43年)に完成したものです。

しかし、長年にわたり過酷な環境のため、老朽化が激しく、落下物等の危険がありましたので、平成18年より募金を行い平成22年3月に修復工事が完成しました。

高松宮様が揮毫された「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」の文字は鮮やかな金色に輝いており、塔の下部の中央には、「祖国を護る勇士よ安らかに眠りください」内側には左右には「戦艦旗艦とする艦隊戦没者」御名前が記されています。

素晴らしい慰霊塔です。慰霊祭の斎行について、伊仙町の町長、大久保 明氏は、慰霊祭を今後も町の事業として継承して行く決意を伺ったが、大変うれしく思いました。

この慰霊祭を執り行うことで英霊を末長くお慰めするとともに、訪れる人々が「恒久の平和平穏を希求する者」の縁となって欲しいと考えるものであり、これを語り続けることの大切さを知りました。もっと多くの人の参加を心から期待するものであります。(小倉 利之記)

万世特攻慰霊碑第四十七回慰霊祭に参列して

評議員 宮本 雅史

平成三十年四月八日(日)、鹿児島県南さつま市の万世特攻慰霊碑「よろずよに」前で、万世特攻慰霊碑第四十七回慰霊祭(万世特攻慰霊碑奉賛会主催)が行なわれた。

慰霊祭では、奉賛会の川野信男会長の追悼の言葉に続いて、第四百三十二振武隊として昭和二十年五月二十五日に散華した矢内廉造少尉の甥、山岸裕幸氏が「英霊の皆様の中に秘められた純粹さこそ今の世の中に引き継がなければなりません。言論、思想の自由の中では色々な主義主張もあるでしょうが、自分の国を護り、故郷を肉親を守るために、ただ一筋身を滅ぼして征った英霊の皆様的心情は、いつの世にまでも伝えなければなりません」と慰霊の言葉を述べた。

また、参列者全員による献花に続いて、希望が丘学園鳳凰高校二年の松山葵さんが「悲惨な戦争の象徴を風化させてはいけません。今の平和を恒久的なものにしていかないといけない」と若者を代表して誓いの挨拶をした。

陸軍最後の特攻基地とされる万世飛行場からは、昭和二十年三月から四ヶ月の間に、

十代の少年飛行兵を含め二百一人の特攻隊員が沖縄の空へと飛び立ち散華した。飛行場跡地の一角に建立されている慰霊碑「よろずよに」の前で行われた慰霊祭には、五十七人の遺族のほか海上自衛隊第1航空群司令や一般参加を含め三百人が参列。奉賛会によると、高齢化が進んでいるため、一



参列者による献花

一般人や元隊員らの参列は年々減りつつあるが、英霊に対する思いが甥や姪など後世にも引き継がれているため遺族の参列者は今後も急激に減ることはないという。

× ×

私は軍事評論家でないため、特攻作戦を論評する立場にない。ただ、大東亜戦争末期、若者が国や家族の安寧を願い我が身を差し出し出撃していった事実、そして見送った家族や親族らの思いだけは、日本人として伝える義務があると感じている。

南さつま市立万世平和祈念館を訪ねる度、自らの部隊を「朗らか隊」と呼び出撃した五人の若者の笑顔が脳裡をかすめる。

特攻隊に少しでも関心を持った人なら一度は目にしたであろう一葉の写真がある。子犬を抱いた少年兵を囲むように、四人の若者が微笑んでいる。飛行服に飛行帽、白いマフラーを巻き、首から飛行時計をぶらさげている。飛行帽の上には「必勝」とかかれた日の丸の鉢巻きをしている。

真ん中で子犬を抱いているのが荒木幸雄伍長で、その後ろにいるのが高橋峯好伍長。ともに十七歳だった。ほかの三人はいずれも十八歳の早川勉伍長、千田孝正伍長、高橋要伍長。五人は陸軍の少年飛行兵（戦死後少尉に）で、第七十二振武隊の一員として、沖縄本島に上陸した米艦隊を撃滅する

ため、昭和二十年五月二十七日未明、万世飛行場を出撃し沖縄近海で特攻を敢行した。第七十二振武隊は当初、五月二十六日に撃滅する予定で、写真は出撃の二時間前に撮影された。ところが、沖縄地方が悪天候のため、急きよ、一日延期された。写真が撮影された時点では、「死」は数時間後に迫っていたことになる。

特攻出撃を間近に控えての笑顔。彼らは何を語り、伝えようとしていたのだろうか。荒木伍長は昭和十八年、海軍飛行予科練習生を受験したが、健康診断で不合格になった。その三ヶ月後、今度は家族に内緒で陸軍少年飛行兵に挑戦して合格。「航空技術者が夢だった」という荒木伍長は東京陸軍少年飛行兵学校に入校、操縦科に配属され、福岡県の大刀洗陸軍飛行学校の甘木生徒隊などで訓練を受ける。

伍長は、訓練時代から特攻出撃するまでの思いを修養録や手紙に記している。

「この訓練に打ち勝たねば、立派な操縦者になる事は出来ない。この辛い訓練の後に、故郷の事を思い、何の此れ位と思いい層奮起せり」（昭和十八年十一月十七日）

「つらいばかりか身の自由がきかない。だが戦地にいる先輩たちはこれ以上の辛い事をやっているのだ。と思うと何で此れ位でまいつてたまるかと思う」（十九年一月

二十六日）  
故郷に思いを馳せながら、少年飛行兵を目指し、ひたすら訓練に励む少年の姿が浮かぶ。

十九年四月二十九日の天長節には「贅沢をしたかったらば、前線を想え。一機でも増産に邁進する青年工員から老工員に至る迄の苦痛を想え。軍人となったからには、国に尽くすを本分となす。明日は忘れもせじ靖国神社の例大祭である。本年も二万柱の先輩の英霊が合祀せられた。此の事を思うと一日一日をのんびりと過ごす事が出来るか。一日も早く立派な操縦者として国家のため尽くす覚悟なり。誠心、誠意、勉強せよ」と自らを諫め、特殊飛行訓練を開始した五月二十日には「我々にはまだ敵機に体当たりする技倆と精神がないのだ。空襲其のときは第一番に飛び立ち敵機に打つかるの気概と技倆とを一日も早く向上せねばならない」と、決意を新たにしている。

修養録は十九年六月二十日、一旦途切れ、翌二十年二月十八日から再開している。

「此の緊迫する一大時機に我空中勤務者として奉公出来るのは真に武人の面目此の上なし。特攻の精神を以て訓練に内務に勉勵せん。敵機来らば敢然此の腕を以て此の襲撃機を操縦して敵に体当たりを敢行し潔く散華せん。死生観に透徹し、死して汚名を



残さず名誉を後生に残さん」(二月十八日)  
再開した修養録には、「死生観」や「特攻」の字が目につき、特攻隊に傾斜しているのが分かる。

修養録は、目達原陸軍飛行場(佐賀県)で待機していた五月二十日、「明日出撃せよとの有難き命令を受く。只感慨無量。一撃轟沈を期すのみなり。最後の秋を朗らかに歌ひ別れの」で終わっている。文章が途中で終わっているのは、最後まで書く時間がなかったのか、それとも感極まったのか。

修養録が途切れている間、荒木伍長は朝鮮半島で、緩降下爆撃や超低空爆撃など実戦に向けての訓練を受けているが、昭和十九年十月、海兵第七十期の関行男大尉(戦死後、中佐に)らによる神風特別攻撃隊が出撃したことを知ると、父親の丑次さんに「大東亜決戦も熾烈さを加え一大国難に際会致しましたとき特別攻撃隊等の諸先輩に引続き愈々皇国の為奮励する覚悟です」とはがきを出している。明らかに特攻攻撃を決意した内容だ。

純真で感受性が強く、環境に支配されやすい十四、十五歳の少年にとって、戦場で国家のために働く先輩飛行兵の活躍が華麗で勇ましく感じたのは当然のことだったの

だろう。戦局の悪化に従って、国家のためには前線に行くことが当然と考え、特攻作戦が展開されるようになると、何の疑問も持たずに自然に出撃を決心している。

修養録に記載されていないが、荒木伍長は特攻隊の命を受けた五日後の昭和二十四月五日、突然、群馬県桐生市の実家を訪ねている。兄の精一さん(九十二歳)によると、伍長は、背筋を伸ばして正座すると、静かで落ち着いた声で「大命が下りました。元気で行きますから」と切り出し、家族一人一人の名前が書かれた封筒を、父親には陸軍航空総監賞と刻まれた懐中時計を手渡したという。

精一さんはその数日後、各務原飛行場(岐阜県)に伍長を訪ねている。精一さんはその時の様子をこう振り返った。

「『かあちゃん身体が強くないから大丈夫かなあ』『後のことは頼むよ』と言った後、『俺はもういらぬから、母ちゃんにわたして』といって十円札を数枚出して私の手につかませた。私は代わりに『これを持っててくれ』といって自分の時計を手渡した」

荒木伍長は、頻繁に家族に手紙を出している。「狙う獲物は敵の空母。任務完遂の為には

何ものもいといません。いざ出撃のときは御両親様始め親戚方の御期待に添ふべく立派な最期を遂げる覚悟です」(二十年四月二十七日消印)

「最後の便り致します。其後御元気の事と思えます。幸雄も栄ある任務をおび、本日(廿七日)出発致します。必ず大戦果を挙げます。桜咲く九段で会う日を持って居ります。どうぞ御身体を大切に。弟達及隣組の皆様宜敷く。さようなら」(五月二十七日消印)

手紙やハガキからも、自分の死と引き替えに、国家の平和と家族の健康と幸せを心底願っていたことが痛いほど伝わってくる。

5人は出撃まで佐賀県と鹿児島県の旅館で待機している。同じ第七十二振武隊の隊員で移動途中に敵襲に会い、大やけどを負って特攻作戦に参加できなかった西川信義軍曹(故人)は生前、特攻命令を受けたときの気持ちをこう書き残している。

「自分が死んで勝つものならと、死を志した。しかし、特攻隊は出撃したらもう帰って来ない。帰えられないのは体当たり攻撃をするための出撃であるので致し方ないが、果たして死ねるだろうか、操縦桿を握って敵艦目指して突込んで行く事が出来るのか、敵空母に眼がくらんで逃げるかも、いやい

や、急降下してぐんぐん空母の艦板が眼前に、眼を閉じて突込むのだろうか：体当たりをする。そのことだけを考えたものであった：」

「毎晩のように宴会で飲んで歌って踊って楽しく人生を過ごすかに見えたが、酒の量も増してくると、笑い上戸あり、泣き上戸ありで困った事もあった：」

「正直のところ死にたくはないのが普通である。ただ、ひたすら国のために体当たりするだけな心掛けて、皆無心になるように勉めたものである

やすやすと特攻隊を決意できたのではない。不安と恐怖感にさいなまれながらも、国家のため家族のために、気持ちを固めていったのである。

また、文献などによると、千田伍長の機付長だった宮本誠也軍曹は、伍長の父親に、宿舎での様子を「自分たちを『朗らか部隊』と名付け、常に歌声を響かせているほど明るくはつらつとしていた。全て行動が自信に満ち純で神を見る如きだった」と伝える一方で、出撃のため万世飛行場に出発する前夜の千田伍長の様子をこう語っている。

「古い手紙やノートを火鉢にくべていました。ちよつと読んでは破いては焼き、何か思い出すように、くすぶる煙を見て居られた。思えば、あと百時間も命をそれとなく整理されて居られたでしょう」

千田伍長は、出撃直前、星空を眺めながら「このきれいな星空も、今夜が見納めだ：お袋たちはどうしているかなあ」とつぶやいていたという。

出撃を控え、早川伍長は「自分が隊長より先に一番機になって突っ込む」と語り、荒木伍長は、私物を整理しながら、ハーモニカを宿の娘に贈ったという。

それぞれが、それぞれの思いで、生への執着を絶ち、最期の時を迎えていたのだ。

荒木伍長らは、子犬を「チロ」と呼び、やつれた子犬に「元気を出せ」「大きくなれよ」と声をかけていたという。

過酷な時代を生き、命を賭けて日本を守ろうとした際の“笑顔”。国家と家族のために“死”を決断した彼らは、目の前に現れた子犬に、生きとし生けるものへのいとおしさを感じ、その瞬間、彼らの脳裏には数時間後には特攻隊として出撃していくという現実も消え失せていたのではないか。荒木伍長の兄、精一さんは「(岐阜県の)各務原飛行場で自分の飛行機を(特攻機用に)爆装する時、まるで喫茶店にお茶でも飲みに行くような雰囲気だったらしい。出撃を見送ったおばあさんから『最後まで朗らかだった』と聞いた」と話した。

以上

### 第59回出水市特攻碑慰霊祭に参列して

専務理事 衣笠 陽雄  
評議員 及川 昌彦

#### 1 慰霊祭の概要

平成30年4月16日(月) 出水市特攻碑頭彰会(会長渋谷俊彦市長)主催による第59回出水市特攻碑慰霊祭が出水市特攻碑公園にて開催されました。

衣笠陽雄専務理事とともに市長主催による前夜祭である交流会からに参加させていただきましたので、慰霊祭の概要を報告します。

参加者は、ご遺族、元隊員、鹿屋から中村敏弘海上自衛隊第一航空群司令、自衛隊鹿児島地方協力本部、自衛隊父兄会、出水市議会議員・商工会議所など41名の和氣藹々とした交流会でした。今月で勇退される渋谷市長にとって最後の交流会となります。地元隊員の参加者は100名だけでした。地元の方々のアトラクションの後、壇上で同期の桜を合唱して明日の慰霊祭の成功を期して散会しました。

翌16日は慰霊祭開会前に伊藤整一海軍大將(海兵39期)にちなんだ「父子桜」の苗木の植樹が行われました。伊藤第二艦隊司令官は戦艦大和とともに運命をとみにされましたが長男の勲中尉(海兵72期)も、ここ出水海軍基地より出撃し戦死されました。

戦後、伊藤大将が東京の自宅庭に植えていたソメイヨシノの根元から新芽が出てきたことから父子桜と呼んでいます。大和さくらの会の岡部拳会長は旧海軍関係の全国約120カ所に800本の父子桜を植樹しています

岡部会長によるあいさつ中に鹿屋航空隊P3C哨戒機が上空を慰霊飛行を行いました。

その後、陸上自衛隊国分儀仗隊・音楽隊と消防団による国旗・軍艦旗掲揚で開式しました。黙祷の後、碑への供花、渋谷市長と遺族代表による慰霊の言葉、儀仗隊棒銃、音楽隊による「海ゆかば」、千羽鶴奉納、全員による献花、音楽隊による演奏は「ラバウル海軍航空隊」「轟沈」「勇敢なる水兵」「異国の丘」「千の風」の後、全員で同期の桜を合唱し、終了となりました。

今回勇退される渋谷市長の永年にわたる尽力により戦争遺跡が整備され掩体壕や地下戦闘指揮所の見学が可能となっています。また、出水市歴史民俗資料館の海軍航空隊出水基地関係資料の特攻隊員の手紙や遺品の展示も充実しており、渋谷市長の並々ならぬ慰霊・顕彰に対する熱意が感じられました。出水市を訪れる機会が御座いましたら、是非ご訪問下さい。

(及川 昌彦記)

## 2 参加所見

●平成三十年四月十六日に実施された出水市特攻碑慰霊祭に初めて参列したので所見を述べる。出水は鹿児島県の知覧・鹿屋等九州南端の基地群からやや離れた地で、全国各地からの多くの特攻機の出撃基地かつ発進基地でもあり他の九州南端基地とは若干様相を異にしていた様である。慰霊祭は今回で五十九回目という全国慰霊祭を見て長い歴史を有し、又当顕彰会から発刊された森丘手記の筆者森丘少尉が所属していた飛行隊所在地でもあった所から、以前からいつか訪れてみたいと思っていた地であった。出発前に、平成二十一年、出水市特攻碑建立五十年を記念して、出水市特攻顕彰会が作成した「特攻碑慰霊祭五十周年記念紙『出水海軍航空隊』」を参考に事前勉強したが、慰霊祭・慰霊碑・出水航空隊等の歴史・経緯、ご遺族・地元関係者の特攻隊への慰霊顕彰への思いについて丁寧に分かり易く纏められており大変参考になった。この本は、正に「出水市の特攻隊・慰霊祭・慰霊碑を知るバイブル」ともなる資料であろうと思われる。

●前夜交流会では、挨拶を求められたので、昨今の全国特攻隊慰霊祭の状況について触れ、本出水市のように市が深い関心を持って慰霊祭を催行しておられる所は、種々の問

題を抱えながらも、ご遺族や地元の心ある方々により今後未長く継続すると確信できる事を説明させて頂いた。

●今回特に印象が残った三名の方を紹介したい。まず現出水市長で特攻碑顕彰会長の渋谷俊彦様。氏は、市長に通算五期約二十年の長きに亘り市政に御尽力されると共に、出水市特攻碑顕彰会長として、地元の出水航空基地から出撃散華された特攻隊員の慰霊顕彰に多大の貢献をされ続けておられる。全国には個人として特攻隊・特攻隊員の慰霊顕彰に長年尽くされた方はおられるが、市長という公的な資格を持たれたまま長年活動された方は多くない。官職では公私混同が煩い中、英霊の慰霊顕彰を強い信念を持たれて敢然と実行されてこられた事は、同様な問題を有する市町村長の鑑であり賞賛に値するものと思われる。あと一週間で任期を終られるとのことであったが、後継者も育成されておられる様で、またお元氣な御様子は引き続き特攻碑顕彰会長でご活躍されるのではないかと思われた。

●次に、安田郁子様。この方は宮崎県高鍋町の御出身で、宮崎において多くの特攻隊員を見送られ、現在は宮崎特攻隊員の語り部という肩書であった。大正十四年生まれの九十三歳の御高齢であるが、九州各地の殆どの慰霊祭に毎年参列されておられると



いうお元気な方で、頭の回転の速い聡明な方であった。父上が歌人という縁で歌人として和歌により、特攻隊員の慰霊顕彰を行っておられる。以前出版された「モスグリーンの青春」の増補新装版を頂いたが、この中には、出撃直前の特攻隊員との交流や最後の姿を赤裸々に描写した短編とそれらの印象を一つの和歌に託して記述されている。全てが特攻隊員との関わりのある歌である。我々が今、特攻隊員の辞世の歌を真剣に読んでも彼らの真意は中々計り知れないものである。特攻隊員の心情把握は、当時の特異な時代背景や日本人の民族性等を基礎として、森丘日誌の様な精神状態の変化が理解できなければ辞世の歌など他人には殆ど理解できないものと思はう。この本の様に、「特攻隊員の最後の行動をある期間見続けられ可成り深く彼らの心情（真情）を把握できるのではないかと思はうがその機会は我々にはない。従って最初に歌だけ詠んで心情を推測し、次に文章を読んで又歌を詠めば彼らの心に一步は近づけるのではと感じた。是非この本を一読して欲しい。特攻会報に立ち上げた文芸欄の我々の歌は今イマイチであるが、今後は安田様の様な方のご指導を得てレベルアップを目指そうと考えている次第です。

●最後は「大和桜の会」代表の岡部 拳

（あぐる）様。今回、同会より寄贈の桜で特攻碑裏手に記念植樹がなされたが、この父子桜の謂れは及川評議員が述べている通りである。氏は現在八六歳との御高齢であるがお歳を感じさせない若さで、前述の二人同様大変お元気であった。当会の桜の苗木に慰霊顕彰を託すという発想も素晴らしく、全国が父子桜で埋まる日が必ず来るものと確信できた。今後も日本中が父子桜で埋まる様是非継続して頂きたいと思つた次第である

●御三方のお話等から、慰霊事業は、中心となる方の長期間熱意と創意工夫を持ち続ける意志と健康並びに後継者の確保が大切であると再確認できた慰霊祭であった。

（衣笠 陽雄記）



開聞岳上空（南西から）

平成三十年度国分基地特攻隊戦没者慰霊祭等に参加して

評議員 長瀬 彰孝

一 初めに

四月二十二日（日）午前初夏のような日差しながら心地よい乾いた風の中、国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭が霧島市にある陸上自衛隊国分駐屯地正門前の特攻碑公園において、また午後会場を移し「特攻隊戦没者慰霊の集い」が鹿児島空港を見下ろす溝辺上床公園で行われ、参加いたしましたので報告いたします。

二 慰霊祭

慰霊碑保存会委員長を霧島市長が勤め、市の全面支援のもと第一第二合わせ四百二十七名の御霊に対し行われた。参加者はご遺族が約三十家族九十名、招待者を含め二百五十名程度であった。特攻碑公園は海軍国分第一飛行場の指揮所跡に作られ、飛行場跡地は陸上自衛隊が駐屯したことから、この慰霊祭は陸上自衛隊が支援している。開式に先立ち海上自衛隊の哨戒機一機が慰霊飛行を行った。

式次第

- ・ 拝礼
- ・ 国旗掲揚



特攻機発進之地公園

- ・ 黙祷
- ・ 慰霊の言葉
- 中重霧島市長
- 中村市議会議長
- 生存者代表 小川さん
- ・ 追悼の言葉 遺族会中島会長

次いで献花が行われ、市長、市議会議長の後、参加遺族関係者全員が行った。各界の代表者が続いたがその中に地元国分小・中学校の代表が含まれていたのが印象に残った。

- ・ 自衛隊による儀仗
- ・ 献奏「国の鎮め」陸自音楽クラブ
- ・ 合唱「同期の桜」
- ・ 「誓いの言葉」国分中学の生徒会長
- ・ 謝辞 遺族会代表

以上で式典は無事終了、式典後参加者の中の希望者による昼会食が自衛隊駐屯地内隊員食堂で行われ、市長による挨拶後喫食した。陸自隊員が配食、湯茶支援を行ってくれました。

国分第一飛行場に係る行事はここまでで、遺族、来賓の多くはここで解散となりました。希望者には駐屯地の広報資料館が開放され、その一角に旧軍資料があることから



陸上自衛隊員による儀仗

三 慰霊の集い

引き続き溝辺会場に参加される4ご遺族とともに市が準備したバスで溝边上床公園に移動しました。主催者は同じながら担当者全員が交代されました。第二国分基地から発進され散華された二百十七名の御霊に対し行われました。参加者は九遺族約三十名、全部で招待者を含め約七十名の参加者でした。招待者の顔ぶれも変わり、溝辺に係りの深い方が参加されている印象を受けました。



上床公園から鹿児島空港の眺め

国分飛行場跡や、特攻隊員の写真が掲示され基地の跡地の面影をしのぶことができました。



上床公園の特攻碑

## 式次第

- ・国歌斉唱
  - ・黙とう
  - ・「遺書」朗読
  - ・献花 来賓の初めに当頭彰会が呼ばれました
  - ・「誓いの言葉」溝辺中学校生徒会長
  - ・遺族紹介
  - ・音楽演奏 陸自音楽クラブ
- 以上で集いの行事は終了しました。参加人員が少ないため全員が献花を行いました。
- すぐ近くに市のコミュニティーセンターがあり、その一角に国分自衛隊駐屯地と同

じ程度の国分第二飛行場及び特攻に関わる資料が展示され見学することができました。十三塚原特攻碑保存委員会が編集された本「鎮魂 白雲に乗りて君還りませ」がここで販売されていました。

## 四 所見

今回当頭彰会は初めてこの慰霊祭に参加いたしました。認知度が低かったのか第一国分基地慰霊祭では献花の機会を当てられず、午後の第二国分基地の集いでは来賓の初めに献花のアナウンスをいただきました。同じ主催者なのに不思議に思い、慰霊の歴史をたどることにしました。

第一国分基地の慰霊碑は昭和三十九年建立され、国分特攻基地記念碑保存委員会（当時は国分市長が委員長）が慰霊祭を執り行ってきました。慰霊祭は最後の発進となった四月二十二日です。今年で五十五回目になります。

一方第二国分基地の慰霊碑は昭和五十四年当時始良郡溝辺町長が中心になり建立されました。慰霊祭は建立の日当たる四月六日でした。

平成十七年市町村合併で、国分市は霧島市と合併、この時始良郡も始良市となりましたが、溝辺町他一部の町は霧島市と合併しました。その際保存会は「国分・溝辺特攻慰霊碑保存委員会」として統一されたそ

うです。また慰霊祭も第一基地の慰霊祭に合わせ行うよう話しあわれたようですが、溝辺の遺族・担当者の強い要望で開催日は同じながら、時間を午後にし、名称も集いとして行うことになったようです。

「集い」では市長等関係者の出席はなく、また追悼文等の披露も無いのはこのような経緯の結果のようです。

行事の簡素化や経費削減の影響もあるのでしよう。

遺族の方の中には、戦友会等が解散する中で、「この慰霊祭は実質市が行ってくれるので助かる。」とおっしゃる方もおられたが、溝辺の慰霊祭がだんだん寂しくなると話す方もおられた。また両式典とも今年度からの取り組みとお聞きしたが、中学生による「誓いの言葉」の発表がありました。但し両文面とも同じで、残念ながら発表者が自ら考えた文面とは思えず、また少し悲惨さばかりを強調し過ぎたように聞こえました。子供たちに参加を呼び掛ける素晴らしい取り組みです。できれば子供たち自らの言葉で発表してもらえれば更にありがたいと思いました。

元溝辺小学校校長の土屋武彦氏が「特攻碑を平和教育に」と題し「鎮魂 白雲に乗りて君還りませ」に寄稿されている



ので、以下要旨を抜粋します。

『赴任当時上床公園の像の前で小学生を見  
つけ「これは何でしょう」と尋ねたところ

「航空自衛隊の人の像」「恰好いい」「公  
園の飾り」といった答えが返ってきた。ガッ

クリしました。戦争を知らない子供たちの  
生の姿だと思いました。眼下に見える鹿児

島空港を指差し、十三塚原航空隊のことや  
特攻隊のことを話し、鎮魂の碑を読み、そ

の内容を説明し、戦時中の学校の様子など  
も話しました。その後も子供たちと一緒に

なる機会があるたびに繰り返しました。こ  
のことがあってから、溝辺小学校の平和教

育の教材に生かすことになりました。そして  
父母の方にもわかってもらうためにPTA

の会合で話したこともありました。特に着  
任一年目の卒業式では「こうして、華やか

な卒業式を迎える皆さんの姿を見ると上床  
公園の特攻像とその前の鎮魂の詩が浮かび

ます。」と述べました。(中略)子供たち  
が上床公園に行ったとき、特攻碑の前を漫

然と通り過ぎないようにしてほしかった  
のです。

今生の別れを告げ飛び立った基地を見つ  
める特攻像に、悲しい歴史の一コマを振り

返り、南海に任務遂行のため散華された方々  
の死を無駄にせず、広い視野からの判断力

を養い、真に平和な社会の建設への努力を

誓い、それを語り継ぐ人になってもらいた  
かったのです。以下略』

溝辺での「集い」の献花者のご芳名の最後  
に溝辺地区各小中学校校長が記され、献花さ

れていた。  
特攻に関わる溝辺の方々の熱い思いが感じ

られた「集い」でした。

### 鎮魂

特攻碑保存会  
元副会長 岩元喜吉

祖国の安泰を念じて

雄々しく散華した

父よ 兄よ 恋人よ そして弟よ

南海の果て 蒼く冷たい波の底に

いつまでも さまようことはない

さあ

南風のががやく白雲にのって

みたまよ 帰っておいで

そよ風に舞う 桜の花びらに

かつての君の 笑顔がある

黄菊 白菊かをる 秋の日差しに

あなたの囁きが きこえる

いま

故郷は繁栄と平和に

せいせいと息づいている

然し そのかげに

赤い血潮を 民族の危急に

捧げて 散った

うら若い空の勇者

あなたのあることを

私たちは 忘れない

想い

母国に打ち返す波のように

今日もまた 白南風にのって

なつかしいふるさとへ

かえりませ

雲の墓標

みたまよ やすらかに

やすらかに



鎮魂の碑

五 最後に

今、霧島市、特に国分地区は地方都市にあつて数少ない人口増加地区とのことです。かつて農地であつた始良郡国分町が軍の飛行場として使用され、戦後自衛隊が駐屯、そして今時代の先端を行くソニーや京セラの工場が立ち並ぶ街として生まれ変わっています。

第二十七回・秋田県特別攻撃隊招魂祭に参加して

会員 高橋 暢

一 概要

平成三十年四月二十九日(日) 正午より、秋田県秋田市川尻の総社神社に於いて、「第二十七回・秋田県特別攻撃隊招魂祭」が招魂祭実行委員会の主催で行われ、「知覧特攻の母鳥濱トメ顕彰会」特別顧問の赤羽潤氏、ジャーナリストの葛城奈海氏、旧軍関係者、秋田県郷友連盟関係者、退役自衛隊関係者、民間有志など約三十名が参列した。

司会の小松富生氏による開式の辞の後、一同、昭和天皇武蔵野御陵を遙拝し、雅楽の伴奏により国歌を斉唱。「日吉の森ハーモニ」の皆さんのハーモニカの演奏による「国の鎮め」と共に英霊に黙祷を捧げ、神事では神前神楽の奉納が行われた。



神前神楽の奉納

続いて、海軍夜間戦闘機『月光』の元搭乗員・藤本光男氏(90)により、若くして散華した戦友達に語りかけるようにして追悼文が朗読され、葛城氏により大西瀧次郎海軍中将の遺書全文が暗唱された。

ハーモニカの演奏による「同期の桜」が響く中での玉串拝礼、主催者代表・舛谷政雄氏の挨拶、一同による聖寿万歳、そして、最後に全員で「海ゆかば」を合唱して閉式となった。

招魂祭終了後は、秋田市にぎわい交流館「エリアなかいち」に於いて、講師に赤羽



追悼文を読まれる藤本光男氏

氏を招き、第二十七回秋田県 特攻慰霊シンポジウム『特攻の母・鳥濱トメと特攻隊』が、葛城氏の司会進行によって行われた。

二 所見

本招魂祭は、平成四年にご自身も元特攻隊員であつた舛谷健夫氏(ツバサ広業創業者・秋田県秋田市八橋)が「特別攻撃隊忠魂之碑」を建立して以来、毎年四月二十九日の正午より、秋田総社神社で行われてい

残念ながら健夫氏は一昨年逝去されたが、その遺志は御子息の政雄氏に引き継がれ、秋田県出身の特別攻撃隊戦没者慰霊顕彰の抛り所となっている。

本年は「特攻の母」として有名な鳥濱トメ氏のお孫さんの赤羽氏が初めて来賓として招かれた。

本招魂祭にトメ氏を招く事は健夫氏の悲願であったと言うが、残念ながらトメ氏存命中には、ついになわなかつたと言う。

それゆえ、この度赤羽氏を招いた事は、本招魂祭において大きな節目になったと、政雄氏が挨拶の中で感慨深げに話しておられたのが印象的であった。

シンポジウムでは、講師の赤羽氏が、祖母トメ氏から伝え聞いた特攻隊員達の様々な逸話を紹介した。

鹿兒島弁を交えた赤羽氏の語りは、時にトメ氏が乗り移ったかのように臨場感溢れるもので、特攻隊員達がどのように最後の日々を過ごしたかを知る上で、大変貴重なお話だった。

会場を見渡すと、招魂祭参列者以外の聴衆も多く見受けられ、中には小学生と思われる女の子を伴った父親らしき姿もあり、このシンポジウムに対する関心の高さが感じられた。

シンポジウム終了後は、一同で秋田県護

国神社へ参拝。その後市内の施設で懇親会が行われた。

本招魂祭・シンポジウムの執行部には若者が多い。

政雄氏のお人柄やリーダーシップによる事はもちろんであるが、健夫氏の思いだったと言う「真に慰霊の心のある」人々が自発的に参加し、それぞれが使命感を持って役目を担っているのが感じられる。

懇親会は若い人々の熱気で満たされ、酒どころ秋田の土地柄、美酒を交わしての談義に花が咲いた。

「今、こうして私達があるのは、先人達のお蔭であり、彼らの事を後世に伝えるのは私達たちの義務です。」

異口同音にそう言い切る彼らの姿に、我が郷土に志士あり、と感動した秋田出身の私は、彼らと夜更けまで痛飲した次第である。

余談として・・・

招魂祭前、私が写真撮影をしている時の事である。ふいに後ろか声をかけられて振り向くと、一人の紳士が微笑んでいた。

慣れないスーツを着た私の襟が捲れ上がったのが気になって声をかけたとの事。見ると大変おしゃやかな装いの方だ。なるほど、私の襟の乱れを捨て置きなかつたのも頷ける。

今日は何かあるのですか、と問われて説明すると、わざわざ自宅に戻って礼服に着替え、招魂祭に参列して下さった。

招魂祭後にあらためて互いに自己紹介をしたところ、秋田市内の小学校に勤務する先生であった。

休日の晴れた日には服装を正して神社に参拝する、という先生に興味と共感を覚え、私は、先生が普段の授業の中で顕彰について取り上げることがあるか聞いてみたくなつた。

不肖、顕彰活動に関わる者として、何かヒントをいただけませんかと考えたからだ。先生は、子供達に『君が代』について教えた事を話してくれた。

『君が代』は、万世一系の天皇が治める世の中を継承していきましよう、という、他の国に例を見ない平和的な内容の歌詞である、と教えたところ、子供達はすぐさま音楽の教科書を開き、自分たちが式典などで唄っていた『君が代』にそんな意味があったのか、と目を輝かせていたと言う。

「子供達は知らないだけなのです。それは、私達大人がしっかり教えていないからです。日本が二六七八年の歴史を誇る万世一系の国である事、天皇陛下が世界の中でも尊敬されるお立場である事、そういうことも、子供達にきちんと教えたいと思います。」



また、大東亜戦争についても、功罪ある中で、功の部分もしつかと伝えなければならぬと考えています。

私は子供達に、自分が生まれた国を誇りに思えるように育てて欲しいのです。」

先生は終始姿勢を正して、右の様に語ってくれた。

今年度から文部科学省は、小中学校の道徳教育に力を入れていくのだと聞く。具体的にどのように入力されるかはさておき、その成果は、実際に教鞭をとる教師の裁量に委ねられるのだろう。

文科省の方針転換を待つまでもなく、教育の最前線にすでにこのような立派な先生がいた事に、私は少なからず感動し、かつ自身の顕彰活動に誠心誠意取り組んで行く覚悟をあらたにさせられたのである。

先生には誠に、「襟を正された」思いであった。



先生、富松、小松、藤、佐藤、清、作、さん、雄、幸、池、大、から、小、松、富、生、さん、藤、清、作、さん、藤、本、光、大、藤、さん、左、藤、さん

平成30年度第64回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

理事 鮎田 英一

平成30年5月3日(木)、第64回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に、当会を代表して参列した。慰霊祭は毎年5月3日、鹿児島県南九州市知覧町に所在する知覧特攻平和観音堂前において、「知覧特攻慰霊顕彰会」主催により斎行されている。

前日、激しい風雨の中を知覧入りし、知覧特攻平和観音堂に隣接する知覧特攻平和会館で企画展「出撃直前の遺書 特攻隊員が最期に伝えたかったこと」を拝観後、特攻隊員の母と慕われた鳥濱トメさんゆかりの富屋旅館に宿を取った。この宿には、特攻隊関係者ばかりでなく、全国各地から、慰霊の誠を尽くしたいとの思いで、毎年のように一般有志の方々も訪ねて来られるとのことであった。

明けて慰霊祭当日は、風が相変わらず強かったものの、雨は上がり、流れる雲の間から青空が広がった。

知覧特攻平和観音堂前には特設の天幕の下、ご遺族を含め約800名の参列者が着座し、慰霊祭は、定刻の13時より、知覧特攻慰霊顕彰会会長である塗木弘幸・南九州市長による「開式のことば」から始まった。

日本礼道小笠原流鹿児島支部のご婦人二名による献茶の後、一同起立して黙禱、浄土真宗僧侶による読経の中、会長、御遺族、来賓、陸軍関係者、各会代表による焼香へと続いた。

その後、会長による「追悼のことば」に移ったが、奉読が始まると、それまで天幕をおり、周囲の樹木の枝を鳴らしていた風が次第に弱まり、悼辞の音が鮮明に響いてきた。

続いて「慰霊のことば」が、南九州議会議長、鹿児島県議会議員に続いて、今回出席の英霊54柱御遺族184名を代表して、第62振武隊・込茶章(こみちやたかし)大尉の弟様である込茶三郎様(88歳、東京都在住)により述べられた。

込茶大尉は兵庫県出身、昭和18年9月、大阪外語大から陸軍に入隊、昭和20年4月6日、万世基地(現、南さつま市)から第62振武隊員として出撃され、享年22歳にして沖縄西方海域で散華された隊員である。

出撃前、御両親に宛てた「山には梅が桃が桜が咲いて居るといふのに、私は万斛のうらみをしのでこれをお知らせします」で始まり「御両親様より一足先に極楽に部屋を借りてお待ちしております。取急ぎ乱筆お許しください」で結ばれる遺書は、万感胸に迫るものがあり、靖国神社頭掲示など

を通じよく知られるところである。込茶様は、大尉が特攻出撃のため下志津から万世基地に飛行するに際し、途中立ち寄った兵庫県加古川飛行場で、家族と暫し最期の別れを惜しむ時間を持てたという、貴重な思い出などを紹介されていた。

次いで、少飛会代表、特操会代表、偕行会代表による「慰霊のことば」、込茶大尉を含む3名の特攻隊員の辞世献詠、慰霊電報披露、参列者全員による献花、陸上自衛隊国分駐屯地音楽隊による献奏へと続いた。最後に、知覧特攻基地慰霊顕彰会を代表し南九州市長代理副市長が挨拶をされ、全参列者が起立し「加藤隼戦闘隊」「同期の桜」を合唱した。

「閉式のことば」とともに一同が礼を終えたときには、開式から2時間が経過し、澄み渡る青空の下、慰霊祭は厳粛のうちに幕を閉じた。

知覧特攻基地戦没者慰霊祭の参列者は例年1000名余りを数えていたが、関係者の高齢化のため年々減少する傾向は否めず、昨年は約900名、本年は約800名であったという。時の流れとともに関係者の数が減ってゆくのは致し方ないことであるが、それにもかかわらず、地元の知覧町、南九州市、鹿児島県、そして自衛隊等の国の機関が一丸となって慰霊祭の実施にあたり、

心のこもる盛大かつ厳粛な慰霊祭を続けておられる御努力には頭が下がる思いである。特に地元住民と思われる大勢の方々が、受付事務、待機会場における接遇、バスによる輸送案内等々、式典の後方支援に真摯に取り組んでおられる姿は印象的であった。

特攻隊の記憶を風化させず、慰霊行事などを通じて、特攻隊の史実を連綿と伝えていくためには、地域に根付いた、日頃からの地道な活動が極めて大切であると改めて感じさせられる慰霊祭であった。合掌。

福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭に参列して

会員 池田 康博

平成30年5月12日(土) 福岡県護国神社の参集殿において、「第6回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭」が、福岡県特攻勇士慰霊顕彰会の主催により催行された。当顕彰会から原知崇評議員と事務局の池田が参列したので報告する。

五月晴れとなった土曜の10時、福岡県護国神社に到着すると、特攻勇士の像の周囲には紅白の幕が廻らされ、慰霊顕彰祭の雰囲気醸し出されていた。その脇の参集殿では、ステージ上に祭壇が設けられ、その下には、床一面に本日の参列者70余名分の椅子が並べられて開式を待つばかりとなっていた。



参集殿内に設けられた式典会場

慰霊顕彰祭は、祭典の部と式典の部の二部構成になっており、定刻の11時、祭典の部が、吉田邦雄副会長による開会の言葉で始まった。次いで、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷「国の鎮め」が、クラリネットやトランペットの吹奏により続き、神事へと移った。

印象的だったのは、吉田副会長が挨拶の中で、米海軍の調査によれば、特攻攻撃による米軍の被害は甚大であった事、そして、フランスの文人、アンドレ・マルローの言葉を紹介しながら、祖国と家族を思う一念



博多券番による舞の奉納

から、恐怖と生への執着もすべてを乗り越えて、決然と敵艦に体当たりをした特別攻撃隊員の精神と行為を讃えられ、そして、祭主である塚田征二会長の、特別攻撃隊員を忘れることなく語り継ぐという力強い慰霊の言葉であった。

式典の部では、特攻勇士の遺書として、諸井国弘海軍大尉の遺書が披露された。次いで、ソプラノ歌手秋山千鶴さんが、美しい歌声で「さくら」、武士道を詠った「菊池一族の歌物語」そして「加藤隼戦闘隊」の3曲を奉納、続いて、博多券

番の舞妓4名による「田原坂」他3曲の勇壮で、また、優美な舞が奉納された。次に、「同期の桜」、「海ゆかば」をトランペットの伴奏により全員で奉唱した。そして、ご遺族代表として松井宏喜様の挨拶、最後に小野正明理事の閉会の言葉で終了した。

直会は、午後二時から場所を「博多すずろ」に変えて実施された。直会の和やかな雰囲気の中、原評議員は、特攻隊戦没者慰霊顕彰会の状況と、現在の特攻勇士の像の建立状況を説明した。福岡県護国神社の田村宮司は、特攻像慰霊祭にまつわる状況や苦労談などを紹介され、遺族の松井宏喜氏は、戦没された予科練のご親族の方のお話や、写真を披露されていた。また、日本会議福岡、福岡県の偕行会、水交会、海友会、郷友連盟、社団法人大和櫻塾、日華(台)親善友好慰霊訪問団、美しい日本の憲法をつくる福岡女性の会他、当地顕彰会の会長をされている調剤薬局(株)裕生堂の塚田代表取締役以下、同社の社員などが参加されており、福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭が、多くの団体で支えられ、しっかりとした運営がなされている事を感じることが出来た。



会場に掲げられた慰霊祭式次第

第52回特攻殉国の碑慰霊祭に参列して

評議員 福江 広明  
会 員 金子 敬志

平成30年5月13日(日) 長崎県東彼杵郡川棚町にある「特攻殉国の碑」前において催行された「第52回特攻殉国の碑慰霊祭」に当顕彰会を代表して参列したので概要・所見を報告する。

一 慰霊祭の概要

当日は前日からの予報通り雨であった。雨になったのは52回を数える慰霊祭のうち、

そのぎ



5 回だけとのことである。

定刻 14 時の 5 分前に「軍艦旗上げ方 5 分前」の放送が流され、参列者は起立し軍艦旗掲揚を待った。

今回は海上自衛隊佐世保教育隊から今年の 4 月に入隊したばかりの隊員により掲揚される事となり、定刻に「上げ」の号令により、軍艦旗が掲揚され、参列者は軍艦旗に敬礼をして慰霊祭が開始された。

「国歌斉唱」「黙祷」に続き、4 名の方が「慰霊の言葉」を捧げられた。

まず初めに祭主の新谷郷総代 廣川英雄様が慰霊の言葉を捧げた。

続いて、第 25 震洋隊和田部隊隊員として特攻出撃待機をされた進藤貞雄様が隊員代表として慰霊の言葉を捧げられた。

引き続き、長崎県知事 中村法道様代読、及び川棚町長 山口文夫様が慰霊の言葉を捧げられた。

終って、「慰霊電報・書翰奉呈」の後、「拝礼」が行われた。

遺族、来賓、元隊員に続き、全参列者が主催者が用意した菊の花を手にして「特攻殉国の碑」の前に進み、全戦没者に哀悼の意を込めて献花をした。

慰霊祭も終盤に近づき、参加者全員による「同期の桜合唱」が行われた後、廣川英雄氏様が「閉式の辞とお礼」を述べ

られて慰霊祭は 15 時 5 分終了となった。

(金子 敬志記)

## 二 所見

第 52 回「特攻殉国の碑」慰霊祭に参列して想う事

特攻殉国の碑慰霊祭の前日、五月晴れの中、空路にて当該式典会場の最寄空港である長崎空港に向かう。羽田空港から約二時間。大村湾に浮かぶ箕島という島全体を開発し、世界初の海上空港として開港した当時（昭和五十年）は、随分と話題となった。着陸が間近となり眼下には、主に海上自衛隊が使用する大村飛行場が見える。戦前から村空と呼ばれ親しまれている特攻機出撃の飛行場であり、長崎空港の前身でもある。実は、大村市は私の故郷である。小学生時代には、国産旅客機として一世を風靡した YS 11 が就航した記念に企画された長崎上空の遊覧飛行を体験したことを思い出す。

翌朝、殉国の碑慰霊祭の式典会場を目指す。宿泊した大村市街地から車で約一時間、生憎の雨模様であったが、右手に標高約 1 km の多良岳を仰ぎ、左手に朝風の大村湾を見ながらのドライブとなる。

風光明媚である上に、扇状地のために風水害が少ないことや、湾内の波高の影響を考慮して、川棚町のこの地が、水上

特攻の訓練適地に選定されたのではないかと推察する。

今回、当地慰霊祭に参列する機会を得たのは、私自身が長崎県出身であるほかに、実父が水上特攻訓練者の一人であったのが関係しているのかもしれない。

厚労省から入手した軍歴によれば、実父は、昭和十九年九月十五日に第十五甲種飛行豫科練習生として鹿児島航空隊に編入。その一か月半後に福岡航空隊、翌年三月には臨時第三特攻戦隊司令部、同年六月に佐世保鎮守府第十四特別陸戦隊へ所轄替えとなっている。ちなみに海軍飛行兵長が父の最終階級だった。

生前、父は軍隊時代について語ることはほとんどなかった。その中でも記憶にわずかに残るのは、「ボート（「震洋」と思われる）に爆弾を付けた水上特攻の訓練に明け暮れたなあ」と憂い顔で呟いた後、遠く見つめていた姿である。

雨天のため、式典会場内にはテントを展開しての開催となったが、新谷郷民の方々が老いも若きも一丸となって、慰霊祭を厳かにして整齊と執り進めていかれる姿に感動すら覚えた。また、特攻殉国の碑保存会・新谷郷総代の廣川英雄氏が慰霊の辞の中で「御英霊の尊い犠牲と、御遺族の方々の深い悲しみを越えて、も

たらされた今日の日本の平和と繁栄があることを、未来を担う次の世代にお伝えてしていく事が、今を生きる私たちの責務」との読み上げは、殉国の碑を伝承する上で郷民の方々の信念を表すとともに、英霊の鎮魂にふさわしいものであった。

式典に参列していると、この地にて特攻の各種訓練に精励し、我が国の勝利と存続を信じて疑わなかった旧軍軍人の息遣いが感じられるのである。

式典終了後、主催側のお一人である西村慎吾氏から益田善雄著の『還らざる特攻艇』を賜った。その中に昭和二十年七月時の「震洋」に関する所属及び部隊名の記載頁があり、「佐世保鎮守府 第三特攻戦隊」を発見。先述の軍歴に照らし合わせると、やはり実父は「震洋」の部隊等に所属していたのだと確信するに至った。

この殉国の碑が取り持つ縁とでも言うべきか、巡り合わせ以上の縁深さを感じる。来年も様々な想いを胸に、川棚町を訪れ殉国の碑の前に立つ私がいるはずである。

(福江 広明記)



慰霊祭前日、現地確認に訪れた際の写真です。

慰霊碑周辺はよく手入れされており、花壇には色鮮やかな花が咲いていました。地元の方々のお気持ち強く伺え、この慰霊碑が地域に深く根付いている事を感じ、本慰霊祭は長く続くものと確信した次第です。

第五十一回予科練戦没者慰霊祭に参列して

評議員 宮本 雅史

平成三十年五月二十日(日)、茨城県稲敷郡阿見町の陸上自衛隊土浦駐屯地武器学校内の雄翔園で、第五十一回予科練戦没者慰霊祭(海原会主催)が行なわれた。

慰霊祭では、陸上自衛隊武器教導隊員による国旗掲揚、海上自衛隊下総教育航空群隊員による儀仗に続いて、乙飛第十八期の故山岸啓祐少尉の実弟、修次氏らが献火。黙祷、献唱、奉詠、献花、陸上自衛隊武器学校長、眞弓康次陸将補と海上自衛隊教育航空集団司令官、西成人海将、千葉繁阿見町長の挨拶の後、遺族を代表して甲飛第十二期の故廣嶋忠夫少尉の実弟、廣嶋文武氏が「(予科練)二人像に眠っている練習生が猛訓練で国を護るため、祖国のために潔く散華したことは色あせることなく心に焼き付いている。永遠に慰霊顕彰をして欲しい」と述べた。

慰霊祭は、参列者全員による「若鷺の歌」奉唱、陸上自衛隊施設学校音楽隊による奉納演奏、武器教導隊による常磐陣大鼓演奏、地元婦人会有志による舞踊「若鷺の歌」で閉会した。

× ×



予科練習生の七人。懇親会は平成五年から毎年、定期的に行われていたが、高齢化のため、その都度、顔ぶれは違ったと聞いた。七人は人間魚雷「回天」の搭乗員で、七人の中には二回出撃して二回とも回天の故障などで帰還した人もいた。甲飛十三期は、全国で二万八千人の練習生がおり、このうち九百三十五人が回天の搭乗員を志願、四十人が戦死したと聞いた。北海道出身者では二十八人が志願し、うち十一人が散華したという。

慰霊祭に参列している間、私は、十年以上前の平成十八年十一月、札幌市内のホテルで開かれたある懇親会を思い出している。

会は、北海道出身で回天搭乗員だった甲飛十三期予科練習生の同期会だった。当時、海軍一等飛行兵曹だった一人は二回出撃したが、最初の出撃では回天の電動縦舵機が故障して発進できずに帰還。二度目は太平洋上で敵艦隊を探すも遭遇できず、そのまま洋上で玉音放送を聞いたと話した。当時、十九歳だったという。彼は、私に当時は思い出しながらこう言った。「帰還して、一ヶ月ぶりに見た太陽の日差しがまぶしくて仕方がなかったことだけは覚えていて。一回目の出撃で一基が自爆したがその自爆音は今でも覚えている。彼が何を思いながら自爆装置のボタンを押したのかと考えると、胸が詰まって何も考えられない。自分が発進できなかったことに対する自責の念が強く戦友に合わせる顔がないというのが正直な気持ちだった。映画なんかで、生きていてよかったと抱き合う場面があるが、あんな気持ちで乗っていたのではない。二回も生きて帰ってきたのが自責の念として強く残っていて、戦後、回天のことは話せなかった」彼の口からは何度も「自責の念」という言葉が出た。私には今でも、彼の言葉が耳から離れない。

「日に日に空襲が激しくなり親兄弟が殺されている。出撃した仲間が戦死して帰って来ない。本土が戦場になれば、大量殺戮、国土崩壊は目に見えている。戦争がいろいろ悪いかという問題とは別に、何とかして敵の侵攻を食い止めたという気持ちがあるが本能的に出てくる。この感覚は今の人には理解できないかもしれないが、当時の若者はみんなそう考えていた。今で言う平和とあの頃の平和は違う。平和を守るためには身体を張らないと駄目なんだ。出撃して死んだら戦友はみんな、颯爽としていい男ばかりだった。今の日本人を見てみると、戦友が何のために死んでいったのかを子供や孫に伝えないといけないと思うようになった」

色々な話を聞きながら、戦後六十年以上も経ったものの、彼らの戦いは終わっていない、だれもが回天への思いを断ち切れずにいるのが伝わってきた。そして、七人の目が、「平和の意味、命の尊さ、そして必死必殺の兵器の人間魚雷を操縦し自らの命と引き替えに日本を守ろうとした若者がいたことを今に伝えなければならぬ」と語っているのを思い出した。

以上



平成30年度第51回若桜の碑慰霊祭に参列して

評議員 原島 淳子

平成30年5月20日(日)三重県津市香良洲町にある、若桜の碑前に於いて斎行された、香良洲神社(大河内宮司)主催の「第51回 三重海軍航空隊飛行豫科練習生戦没者・三重海軍航空隊戦没者 若桜の碑慰霊祭」に、当顕彰会を代表し参列させていただきました。



若桜の碑

慰霊式典は、若桜の碑前に於いて、式典開始のアナウンスにより、式次第に沿い粛々と進められました。神職及び一同着席の後開祭の辞、三重県隊友会会員による点鐘、君が代が流れる中の国旗掲揚・献花と続き、香良洲神社による神事に移りました。



祭壇、奥が若桜の碑

神事は、修祓・降神の儀・祭主一拝の儀・献饌・祝詞奏上と進められ、海ゆかばの流れる中、主催者代表の香良洲神社氏子総代を始めに、後援会代表・来賓・お仲間・御

遺族の方々の玉串奉奠が行われました。その後撤饌・祭主一拝の儀と続き、神職が退下され神事は終了し、主催者挨拶へと移りました。

主催者香良洲神社氏子総代会会長今井様からは、「慰霊碑を末永く守っていく」と言う嬉しい言葉が聞かれ、後援会代表の三重県隊友会会長三石様からは、「旧若桜顕彰会より任された慰霊碑は、第3水曜日を清掃日と決め、守っている」とやはり力強い挨拶がありました。また、旧若桜顕彰会今井様よりは、香良洲神社氏子の方達・三重県隊友会の方達への感謝の言葉が述べられました。

続いて追悼文を、当顕彰会藤田理事長の代理として私が、御奉納させて頂きました。その後慰霊電報披露・三重県隊友会相談役青木様による奉吟と続き、旧若桜顕彰会会員による、三重海軍航空隊隊歌奉唱が行われ、終祭の辞をもち慰霊式典は終了となりました。

慰霊祭に先立ち、会場に隣接している、津市香良洲歴史資料館(若桜会館)を見学させていただきました。ここには嘗て、豫科練教育を専門に行う三重海軍航空隊がありました。敷地面積は1.3平方キロメートルあり、香良洲市の三分の1の面積を占めていたそうです。ここで学び、海に空に

出撃し散華された若鷲の皆様に想いをはせ、資料・遺影・遺品等々を拝見させていただきました。

中でも、飛行機の風防で作られていた飛行機の飾りに目を奪われ、「若鷲は南の空に飛び立ちて、帰るねぐらは靖国の宮」と言う辞世の句には目頭が熱くなりました。

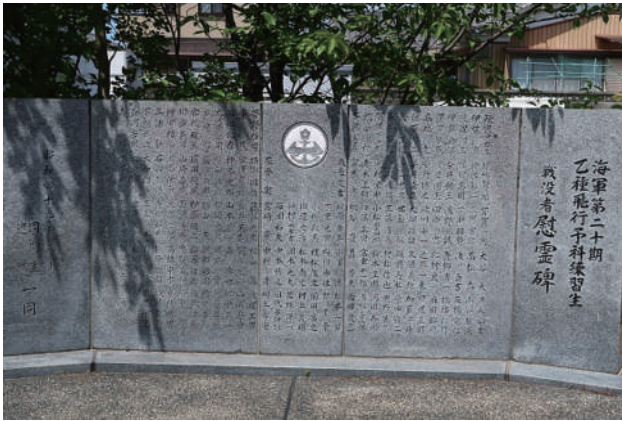
この辞世の句は、藤川特別攻撃隊加井二飛曹のもので、偶然にも、4月に参列させていただいた宮崎特攻基地慰霊祭の会場に遺詠碑が建立されている方でした。何か不思議な縁を感じずにはいられませんでした。

また、修学旅行で見学に来たという大阪の小学校6年生からの手紙(感想分)が1階ロビーに置かれており、拝見したところ精神注入棒に驚き、17・18歳で特攻で亡くなった人がいる事に驚きながらも、今の自分達の生活は甘いと思う等々の言葉があり、何かを感じとってくれたのではないかと思います。この子達が次世代の語り部として育ってくれる事を切に願って止みません。慰霊祭が行われる若桜の碑霊苑には、お仲間達それぞれが建立した各期の碑も12基ありました。その一つ一つに手をあわせていただきましたが、胸がつぶれる思いでいっぱいになりました。この慰霊祭は、お仲間が在天のお仲間のために行っている慰霊祭ではないかと思いました。嘗て土浦の慰霊

祭の時、展示されていた同期の方のパネルを指さし、「こいつらがいるから慰霊祭に来るのだ」と話されていた方の想いが甦りました。また当日は、土浦の慰霊祭と同日だったためか、いつもより参列者が少なかつたのが残念でなりませんでした。来年はまた敵かに・賑やかに行われる事を願っております。

最後に次の歌を捧げます。

神聖の 三重に学びし若桜  
想いを胸に 君は飛び征く



第20期乙飛戦没者慰霊碑

平成30年度「千葉縣特攻勇士之像慰霊祭」に参列して

会員 金子 敬志

1 慰霊祭の概要

平成30年5月26日(土) 11時より、千葉縣護國神社において、「千葉縣特攻勇士之像慰霊祭」が斎行された。本慰霊祭は「千葉縣特攻勇士之像」が建立奉納された平成23年5月26日に合わせて、毎年5月26日に千葉縣護國神社境内の「千葉縣特攻勇士之像」前で執り行われているものである。当日は千葉縣隊友会、千葉縣偕行会、千



特攻碑前に集合した参列者



葉県東葛偕行会と当顕彰会からの小倉理事  
以下2名を合わせて計12名が参列した。

式次第

- ① 修祓
- ② 降神之儀
- ③ 献饌
- ④ 祝詞奏上
- ⑤ 玉串奉奠
- ⑥ 撤饌
- ⑦ 昇神之儀



神事を執り行う神官

薄曇りの空の下、慰霊祭は式次第に従って厳かに整斉と進行し、滞りなく終了した。

この後、参列者による記念撮影を行った後解散となった。

2 所見

今回の慰霊祭は平成23年の建立から8回目を数えるものである。

本慰霊祭は千葉県護国神社の主催になるもので、参列者がいなくても催行すると言う神社側の強いお気持ちによるものである。そのため御案内状は送付されないで、事前の申し込みが無くとも参列可能である。先に書いたように毎年5月26日11時より催行され、式典の時間は約30分である。ぜひ沢山の方ご参列を御願いしたい。



竹中宮司を共に記念撮影

第68回関西白鷗遺族会及び第4回一般社団法人関西零戦搭乗委員会合同慰霊祭に参列して

理事 白田 智子

平成30年5月27日(日)、京都市内の「京都霊山護国神社」に於いて第68回関西白鷗遺族会及び第4回一般社団法人関西零戦搭乗委員会合同慰霊祭が斎行され、特攻顕彰会から理事長代理として参列したのでご報告します。

当日は5月にも関わらず、日差しが強い暑い日でしたが午前10時半に、舞鶴市から来られた、海上自衛隊第23航空隊(ヘリコプター部隊)の隊員さんによる軍艦旗掲揚が行われ、予定時刻の11時に御本殿に於いて慰霊祭が始まりました。

慰霊祭は国歌「君が代」の斉唱に始まり、修祓の儀、斎主の祝詞奏上と神式に則り順次儀式が進みました。祭文は、一般社団法人関西零戦搭乗委員会筆頭理事代理の秋山克次理事と、第13期海軍飛行予備学生山田正一中尉の弟で、関西白鷗遺族会副会長の山田正治様の2名が奏上しました。その後斎主以下参拝者が玉串を奉奠し、最後に宮司並びに来賓と主催者からのご挨拶が有り、慰霊祭は終了しました。

その後、境内にある「あゝ特攻勇士の像」



前に皆さん移動して、特攻勇士に対する慰霊祭が斎行されました。まず、私が理事長に代わり祭文を奏上した後、参列者全員で参拝しました。その後軍艦旗の降納が行われ、一連の慰霊祭が終了し、境内の斎館にて懇親会に移りました。

懇親会の席では、産経新聞（5月28日社会面）にも報道されましたが、米国立公文書館で発見された、西口徳次中尉機が沖縄北方で米駆逐艦「イゼルウッド」に突入する瞬間の映像が紹介されました。これは、大分県宇佐市市民団体「豊の国宇佐市塾」の方が、海軍少佐（戦死後2階級特進）西口徳次様のご遺族からの依頼を受け、米国立公文書館で映像と関連資料を見つけ、これを遺族が持っていた資料と旧海軍の記録が一致したので西口中尉の突入と判明したもので、同塾の織田様ともう一人の方が代わる代わる映像の説明をして下さいました。西口少佐の妹の杉山智恵子様为代表して皆様にご挨拶をされました。肉親の見守る中で映像は写されましたが、73年の年月が過ぎて事実が判明したもので、妹様も少しの間言葉が述べられませんでした。私も父が特別攻撃隊として戦死した遺族なので痛いほど智恵子様のお気持ち解る気がしました。私は瞬きもせずその映像を拝見し、説明をお聞きました。智恵子様は小さかったため西口中尉の記憶は殆どありませんが、

お姉様方がお兄様の事を覚えておられました。智恵子様の小学4年生のお孫さんが昨年家族と鹿屋（鹿児島県）を訪問し、夏休みの宿題として一冊の冊子を作られました。大叔父に当る西口徳治様の事が書かれていたその冊子を私は手に取って読みました。とても解りやすく素晴らしい冊子でした。今日、懇親会の出席の皆様と一緒に西口徳次様の最後を見守る映像を観させて頂き、安らかにと心の中で私は手を合わせました。また、懇親会の席には京都の漫画家、曾山舞様がいらしてました。関西白鷗遺族会会長の山田正克様から紹介され、ご挨拶をされました。曾山様は昨年の夏に、生き残りの特攻隊員三人の半生を取材して描いた単行本「漫画 特攻最後のインタビュー」を作成出版し、そのご紹介がありました。最後は関西白鷗遺族会の加藤昇様が閉会のご発声をなさり散会となりました。

京都霊山護国神社の慰霊祭に参列、参加出来ました事、そしてお世話になりました。関西白鷗遺族会会長山田正克様、そして関係者の皆様に御礼申し上げます。

\*西口徳治中尉（戦死後少佐）

第13期海軍飛行予備学生

関西大学出身

第9建武隊として出撃、昭和20年4月29日沖縄北端120度60マイルで米駆逐艦「イゼルウッド」に突入散華

沖縄県護国神社「あゝ特攻勇士之像」奉納に関するご報告

事務局長 石井 光政

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰の大切な事業の一つとして、平成19年から「あゝ特攻勇士之像」の各県等の護国神社への奉納事業を始め、今年には沖縄県護国神社に、当顕彰会としては3年ぶり17体目の像を奉納することが出来たのでご報告します。

奉納は平成30年4月23日（月）に護国神社の春季例大祭（今年は直前に天皇皇后陛下の沖縄行幸啓が有り、沖縄県護国神社にも幣饌料を賜り、「天皇皇后両陛下幣饌料御下賜報告祭」も併せて斎行）に引き続き、同境内の大手水舎前で除幕式及び慰霊祭が斎行された。除幕式は、建立委員長外間盛善様（沖縄県護国神社会長）、建立委員宮城篤正様（沖縄県遺族連合会会長）、特攻隊隊員戦友会代表 戦友ご遺族飯井昌弘様、そして顕彰会代表として藤田理事長及び特攻隊戦没者遺族代表として臼田理事により行われた。

その後慰霊祭に移行し、航空自衛隊南西航空音楽隊の演奏で、全員による国歌斉唱を、そして修祓の儀、降神の儀、献饌と続き、斎主である沖縄県護国神社の加治順人宮司による祝詞奏上が行われた。引き続き



除幕式



加治宮司のご挨拶

航空音楽隊による沖縄民謡の奉納演奏が行われ、音楽隊の演奏を背景に全員で玉串奉奠、その後撤饌、昇神の儀と続き、最後に加治宮司からの斎主挨拶で一連の慰霊祭が終了した。加治宮司のご挨拶では来年以降も春の例大祭に併せて特攻勇士の像前で特攻隊の英霊に対する慰霊祭を斎行する旨、ご案内があった。慰霊祭には沖縄県内外から約70名の方が参集され、特に今回の慰霊祭では在沖縄陸海空等の各部隊長等も参列していたが、本護国神社は正月に各部隊が部隊の安全祈願に訪れる神社でもあり、都度、

特攻像にも参拝でき、英霊もお慶びになるものと思う。

特攻像の台座には沖縄県護国神社による碑文が嵌め込まれており、これには他県の護国神社では通常当該県の出身者を慰霊の対象としているのに対し、沖縄は沖縄戦に併せて沖縄周辺海域等で多くの特攻隊員が散華されたことに鑑み、この方たちも併せて慰霊顕彰する旨記述されている。碑文の全文を掲載するので御覧いただきたい。

碑文

「沖縄を護るため、航空機による空の特攻、戦艦や特殊潜航艇による海の特攻、爆雷を用いての陸の特攻で散華されたすべての特攻戦没者、並びに戦地に赴き特攻にて散華された沖縄県出身の戦没者を永久に顕彰する。

空の特攻

大東亜戦争末期、最後の手段として航空機による特攻が行われた。

特攻隊員の中には、昭和19年12月16日フィリピンスマラフ島付近で 海軍神風特攻隊として戦死した我喜屋元次郎少尉（伊計島出身）ら沖縄県出身者も存在する。

沖縄戦においては、昭和20年3月26日那覇南西洋上にて戦死した陸軍特攻隊の伊舎堂用久中佐（石垣島出身）をはじめ、終戦まで沖縄を護るため海軍1957名（982機）、陸軍1031名（義烈空挺隊含む891機）が特攻で散華した。

海の特攻

昭和20年4月7日戦艦大和を旗艦とする第二艦隊は、海上特攻隊として沖縄を死守すべく出撃したが、坊ノ岬沖にて米軍機の攻撃を受け、約三千名が戦死した。その中には沖縄県出身者が37名も含まれている。

また、沖縄守備隊として渡嘉敷、阿嘉、慶留間、座間味、北谷、読谷、与那原、那覇、具志頭、糸満、玉城に配備されていた



陸軍海上挺身隊「マルレ」、金武、石垣、宮古、小浜に配備されていた海軍「震洋」挺身隊、運天港に配備された特殊潜航艇「蛟竜」は、米軍の砲撃を受けつつも米軍艦艇に対し攻撃を行った。

他にも人間魚雷「回天」は伊号潜水艦に搭載され、昭和20年3月から沖繩近海に出撃し、多くが艦艇と共に散華した。陸の特攻

首里に司令部を置き、宜野湾、浦添以南に陣地を配備した沖繩守備隊第32軍は、昭和20年4月1日沖繩本島中部西海岸に上陸した米軍と壮絶な戦いを繰り広げた。その際、激戦地となった嘉数高地（現在の宜野湾市嘉数高台公園）や安里52高地（現在の那覇市おもろまち）での戦いでは、手作りの梱包爆雷を抱えた兵士による敵戦車への肉弾特攻が行われた。

また、県内各地の戦場でも鉄血勤皇隊などの沖繩県出身学徒による爆雷特攻が行われ、壮絶な最後を遂げた。

平成30年4月23日

沖繩県護国神社

今回顕彰会から遺族代表として参列した白田理事のお父上は、第23振武隊隊長として昭和20年4月1日に知覧から出撃し沖繩西方の慶良間列島周辺で敵艦に突入し散華

された、伍井芳夫大尉です。今回の特攻像奉納は白田理事にとつても格別の思いであり、その思いを寄せて頂きましたので以下に掲載します。

念願だった「あゝ特攻勇士之像」が沖繩県護国神社に建立された。特攻の像の建立にご尽力頂いた外間建立委員長、沖繩県遺族連合会会長建立副委員長宮城篤正様そして関係者の皆様にご心より御礼申し上げます。今から16年前（平成14年5月23日）特攻隊戦没者海上慰霊を行いました。私は姉を誘い一緒に参加しました。那覇市の泊港から慶良間諸島の渡嘉敷島に向かう村宮フェリー「慶良間」に乗船し、その船の甲板上で、神職に祭壇を用意して頂き、盛大に厳粛に海上慰霊を行いました。

その時の神職が現在の沖繩県護国神社宮司加治順人様でした。姉も私も父の眠る一番近い場所です。慰霊が行われている。私達は感動し、感涙しました。沖繩戦で特攻戦死され散華された英霊の皆様のご冥福を祈り、菊の花を海の中に投げ入れました。

特攻隊戦没者海上慰霊を行なった加治宮司とお会いする機会が出来ました事、英霊の御加護と思われました。「あゝ特攻勇士之像」除幕式の席で私が特攻隊戦没者遺族代表として、特攻隊戦没者慰霊顕彰会理事長

藤田幸生様、特攻隊隊員戦友代表戦友ご遺族飯井昌弘様、沖繩県護国神社代表役員（建立委員長）外間盛善様、沖繩県遺族連合会会長（副委員長）宮城篤正様により除幕が出来ましたことは思いがけない出来事でございます。参列させていただきその上除幕までさせていただき大変光栄であり、嬉しく思いました。

これからも「あゝ特攻勇士之像」を永久に御守り頂けることとお願ひ申し上げます。

お世話になりました皆様に感謝と御礼を申し上げます。

理事 白田 智子



左から、藤田理事長、白田理事、石井事務局 局長



陸軍航空特攻と爆弾

会員 大槻 健二



1 はじめに

我等ハ空挺、斬込隊ト異リ此ノ目ニテ戦果ヲ確認シ得ザルヲ以テ完全、安心シ得ル丈ノ衝突準備ヲ整ヘ置カザルベカラズ (勤皇隊長 山本卓美中尉の日記より)

特攻隊員の心情は、現在に至るまでその遺書や生還者の回想等から様々な方面から分析され、語られてきた。しかし、その特攻隊員が離陸した後の諸作業：戦技に限らず、操縦、航法、索敵、通信、そして爆弾に関する操作等は、冒頭に掲載した「山本日記」の様に、任務遂行に不可欠なものでありながら、あまり焦点を当てられる機会が無かった。

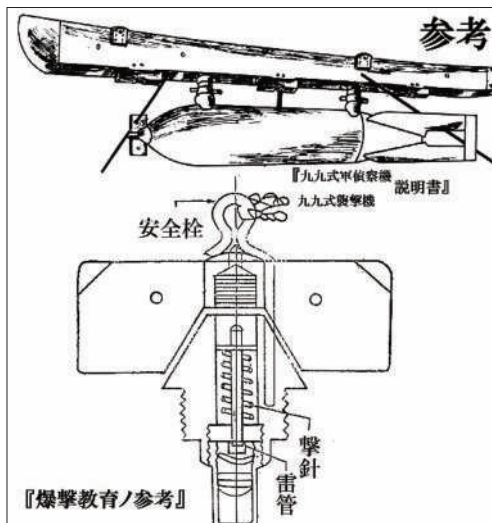
2 資料に見る特攻と爆弾

体当り攻撃において爆弾を爆発可能な状態にするためには、信管を可動状態にする必要がある。これに関し、次に引用する文が平易で理解しやすいので紹介する。

『爆弾の話』(昭十七 柴田眞三郎著)

信管には爆弾が飛行機から離れた後でなければたとひ激突しても撃針が動かぬよう安全装置が施されてあります。其の一つは安全割栓でありまして、之が挿してある間は撃針は動きません。然し安全割栓は飛行

陸軍では特攻隊を「と号部隊」といい、と号部隊に用いられる飛行機を「と号機」という。航空総監部が発行した小冊子『と号部隊戦闘要領』(昭二十・二)総則第三項では、と号部隊の本領を、「生死ヲ超越シ真ニ捨身必殺の精神ト卓抜ナル戦技トヲ以テ独特の戦闘威力ヲ遺憾ナク發揮シ航行又ハ泊地ニ於ケル敵艦船艇ニ轟進衝突シ之ヲ必沈シテ敵ノ企図ヲ覆滅シ全軍戦捷ノ途ヲ拓クニ在リ」とし、明確に体当り戦法およびその目的を定義しているが、「轟進衝突シ之ヲ必沈」する任務を達成するためには爆弾を確実に爆発させなければならず、そのために必要な改修が機体に施され、突入前、隊員によつて諸々の操作が実行された事に対しても思いを馳せてみたいと思ひ、本稿にまとめてみる事にした。



此の風車が抜けて飛ぶのは、弾が飛行機から離れてからであります。風車が附いている以上は、爆撃機が爆弾を抱いた儘、敵艦上自爆せんとしても弾は爆発しません。(中略) 信管風車を投下機に引掛けておこなぬといふ操作は、飛行機が離陸する前

ければ出来ません。即ち敵艦に対する自爆は現場に至って止むを得ず決心せられたこととなく、予め信管の風車を投下機に引掛せずに出発せられた初めから覚悟の必死必殺の決死行動である(後略)

特攻作戦前の体当り攻撃の思想について筆者は未確認ではあるが、昭和十七年出版のまでの時点で、このような考えはあったものと考えられる。具体例は挙げていないが、『戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(3)』の記事においても「第一線部隊では被弾して生還の見込みがない場合、機上から爆弾の安全装置を外して体当りを敢行できるよう機体を改修するものもあつた」と記してある。安全装置を解除しての体当り攻撃は爆撃に任ずる実戦部隊の空中勤務者には、一つの手段として少なからず認知されていたのではないだろうか。次に、前掲の『と号部隊戦闘要領』(以下『戦闘要領』とする)を引用する。

タル安全針ヲ拔脱ス  
然ルトキハ信管風車ハ風圧ニ依リ安全ヲ解除ス而シテ操作把手ノ索曳長ハ各々三〇〇  
耗程度ニシテ安全ヲ解除ス

『と号空中勤務必携』(昭二十年五月  
下志津飛行部隊)における記述は前掲『戦闘要領』とほぼ同文であるが、次の一文が加えられている。「但シ装置不足ナルカ又ハ其ノ装置ナキ場合ニ於テハ安全針ヲ信管風車ニ装スルコトナク出発スルモノトス」終戦間際だけあつて、器材不足の一面が感じられる。この実例は正規に編成された隊においては少なく、台湾等の現地で編成された隊に、それらしい記述を少数見た程度であつた。しかし具体的ではないためここでは省略する。「機上安全解除装置」については、いくつかの証言が残っている。以下、関係する記述を紹介する。  
尚、著者については筆者の独断により省略させて頂いた。

① 飛行第二十六戦隊(台湾 一式戦闘機)  
特攻直掩機S氏の回想(『特操一期生史』より)  
突入する直前に、座席にある針金を引いて、  
弾の安全装置を外しさえすれば、突入の瞬間  
炸裂する仕組になっていた。(中略)

「安全装置をはずせ」私の信号で全機一斉に座席の引金を引いた。真鍮の破片がハラハラと落ちて黒い海面に消えた。爆弾は今や起爆状態である。「さようなら」「さようなら」彼等の一人一人と手を振り合つて、最後の別れを惜しんだ。

② 第一期特別幹部候補生出身者T氏(機種不明 『行雲』より)  
各務原飛行場に、特攻機の爆装訓練の命令を受けた(三、四名)の候補生が木脇を出発したのは昭和二十年三月でした。現地での訓練は、むずかしいものではなく、爆弾先端の小さなペラと、操縦席の特設レバーを、細いワイヤーで継なぎ、突入寸前にレバーを引き、起爆状態にして突込む方式で、完全作動を維持せしめる訓練であつた。

③ 八紘隊第二隊「一宇隊」(隼III型)  
O氏(『特攻の海と空』渡辺洋二著より)  
我々の機には初めから、風車止めの針金を付けていました。目標の海域に確実に近づいたときに、はりがねを引くのが当たり前なのです。

④ 司偵振武隊(一〇〇式司偵) 生還者U氏(『生命若く燃えて』より)  
爆装は、弾薬庫から八百疋(海軍は八十番という)の爆弾二発が特攻機のそばに運ばれ、一機宛胴体下部中央の懸吊金具につけられた。爆弾の頭部と底部の両方に信管が

つけられ、金属扇が風圧で廻るようになってくる。それが廻り終れば、いつでも衝撃で爆発するようになっていたのである。そのため金属扇の信管には針金(鋼線)が通してあり、操縦席に導入されており突入の前にその針金を引けばよいのである。

⑤ 第二十二振武隊(一式戦闘機) 生還者K氏(『猛き鷲の子・雲の墓標』より)

● 出撃直前の回想

隊長の言葉は続く。『離陸したらず爆弾の信管の安全ピンを抜き、何時でも爆発出来るようにしておくこと。(中略)』

● 離陸後の回想

機は浮揚した。脚を入れる。真下は海だった。操縦桿の付け根左側にある『トツテ』を握り、力一杯引く(信管の安全ピンを抜くため)手ごたえがあった。

⑥ 第二十二振武隊(一式戦闘機) 生還者O氏(『特操1期生史』より)

左翼に増槽、右翼下に黒光りの二五〇キロ弾を装着し脱着作業を行っている、「少尉殿万一電磁回路故障の場合このワイヤーを引き抜き落して下さい」座席下に丸めた輪が左右二つあり苦心の作だそうで、弾頭の起爆安全ピンは喜界を出る時忘れずに抜くこと等打合せをし(後略)

⑦ 第四百三十二振武隊(二式高等練習機) 生還者S氏(『憧れた空の果てに』より)

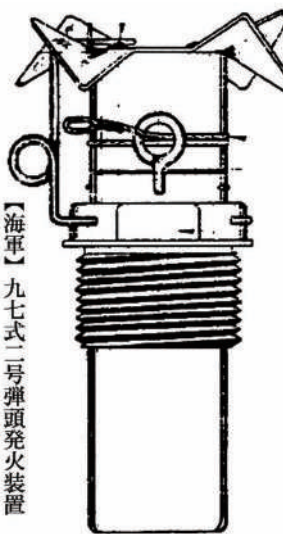
この一弾と共に敵艦に突っ込んで行くと思うと、頼もしく、また愛しささえ覚える。整備兵より機体の状況に付いて、再点検の後に十分な地上試運転により、異状なく好調であるとの報告を受ける。次いで彼は、操縦席内の増槽投棄ハンドルを示し、これを引き上げる事により弾頭の頭部と尾部にある、信管を覆うプロペラが風圧で外れ、信管頭部が剥き出しとなり、僅かな衝撃でも爆弾は炸裂する。従って突入する前には、必ずこのハンドルを引いてくれという。

⑧ 第三〇三振武隊長(一式双発高等練習機) H氏(『生と死の谷間で』より)

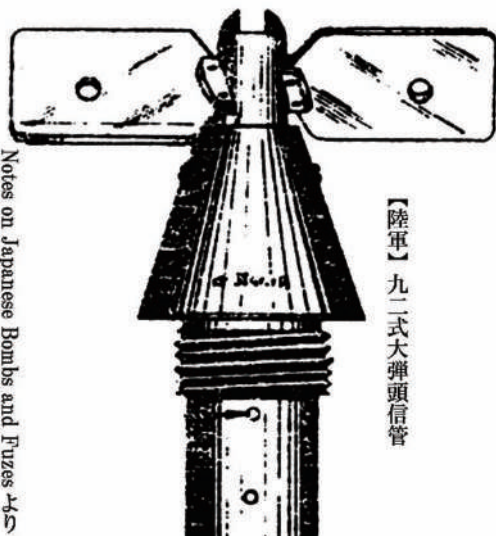
私たちの乗機一式双練の場合は、まず胴体下部に五〇〇キロ爆弾の懸吊架を取り着けた。次に操縦席から爆弾についている信管の安全装置を外すためのレバーと、爆弾を棄てる時に使用する投下レバーを取り着けた。

以上、八つの事例を挙げたが、継続して事例を収集していく。また陸海軍と双方の爆弾が使用されたため、「信管安全風車」の固定法に若干の差異があった可能性がある。「安全ピン」と「針金」の違いであるが、推測の域を出ないため今回は割愛する。参考まで下に図面を掲載しておく。なお、信管については事例④⑦の通り弾頭信管と弾底信管について触れているが、衝撃で弾

頭信管が不良あるいは破損した場合確実に爆発させる予備として弾底信管が装着されているものと推測する。



【海軍】九七式二号弾頭発火装置



【陸軍】九二式大弾頭信管

Notes on Japanese Bombs and Fuzes 149

冒頭に引用した山本卓美中尉の日記中に  
おいては、「二百五十疋ノ信管弾底ナキ為  
大分モメタルモ、遂ニ片方弾底信管ヲツケ



行クコト、ナル、効果少クトモ爆発ノ確実ヲネラフ」とある。確実性の追求には、プロとして並々ならぬ戦意が感じられる。

### 3 爆弾は投下出来たのか

第2項にて紹介した事例の⑧において「爆弾を棄てる時に使用する投下レバーを取り着けた。」とある。特攻機の爆弾は全て投下出来なかったと思っている方も多く居られるものと思うが、実際はどうであったか。判断材料として簡単に触れておきたい。

前掲『戦闘要領』より。

・状況特ニ天候氣象ノ障碍、目標ノ不発見等ニ依リ中途ヨリ帰還スルノ止ヲ得ザル場合(中略)中途帰還シ着陸スルニ方リテハ特ニ沈着整齊タル着陸実施スルヲ要ス此ノ際指揮官ハ脚ノ弱キ機種又ハ操縦者ノ技倆ヲ考慮シ搭載爆弾ヲ予メ危険ナキ地点ニ投下セシメテ着陸セシムルヲ要スルコトアリ

・「と」号機爆弾投下法ハ主トシテ手動投下ニシテ特ニ爆撃電気配線ヲ保有スル機種ハ電気式投下可能ナリ

口、手動投下装置ハ操作把手、「ボーデン」索等ニヨリ成リ把手ヲ引ク事ニ依リ電磁器ヲ作動セシメテ爆弾ヲ投下ス

既存の方法であり、その要領は確立されていたものと推測する。関係者の回想には、海上に爆弾を投棄した例が多数残っている。また、『会報特攻二十七号 特別攻撃飛行隊員の本音』という回想文には、

本来脚保護のため二五〇キロ爆弾は海上に投棄して着陸すべきところ、(中略)無謀にも離陸時のままの姿で着陸したため、機付整備兵が驚嘆しておった事を思い出す。

という記述もあった。『戦闘要領』でも触れていたが、大型爆弾懸吊時の操縦者の共通認識と考えられる。

また、第四百三十三振武隊(二式高等練習機)生還者A氏の回想(『特攻基地』)より、

ところが、二百五十キロの爆弾を腹に抱えていたために、着陸不能である。(中略)海上に飛び、爆弾を落とすことにした。手動式のレバーを引くと、爆弾は落ちた。こうして、私は知覧基地に帰ったのである。

とあり、これに対し、先の実例⑦に引用した第四百三十二振武隊員の回想の続きには、「他に爆弾を外すハンドルはどれかね」と尋ねると彼は「その装置は機内にありません、胴体下でしか外すことはできないのです」という。

この二つの回想は、同じ第二航空軍(満州)編成の特攻隊であっても爆弾の投下可

能・不可能の差が出る興味深い例である。尚、後者は、

「洋上でエンジン停止となった場合は自爆せよ、敵機と遭遇した場合は爆弾を外し身軽になり長機を援護することも出来ず、全機なぶり殺しということか(中略)それ程までに我ら操縦者に不信を抱いているのか。俺は我らの赤誠に傷をつけられた思いで腹立たしさを覚えた」

と、回想している。爆弾が投下不可能であったことは、戦闘に赴く空中勤務者のプライドを傷つけるものであった事が受け取れる。現代人が「残酷」と片付けてしまう程単純な精神状態ではないだろう。

次は終戦間際の台湾の屏東飛行場の整備兵の回想である。

正規の爆弾搭載量五百キの九九双軽に、安全装置を取り外した八百キの爆弾を抱かせて、台中飛行場から発進するのを見送ったが、爆弾倉には八百キは収まらないので、扉を左右に開いた儘で応急加工した懸吊架に吊り下げ、ワイヤーで縛って安定をはかった。

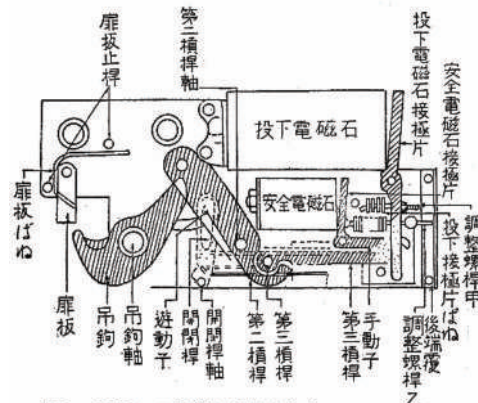
(『回想!思い出の数々』)

ここには爆弾と飛行機の適合という物理理由が挙げられている。

他、回想文を探すと、八紘第六隊石腸隊(『特攻 最後の証言』)、第二十振武隊(『特操 一期生史』)では爆弾を投棄。第

二十九振武隊（『猛き鷲の子・雲の墓標』）は投下不能とあった。

近年、「萬朶隊」を例として爆弾が投下出来なかつた事を悪意からのものと見做す向きもあるが、安易な断定は避け、冷静に精査することが必要と思う。



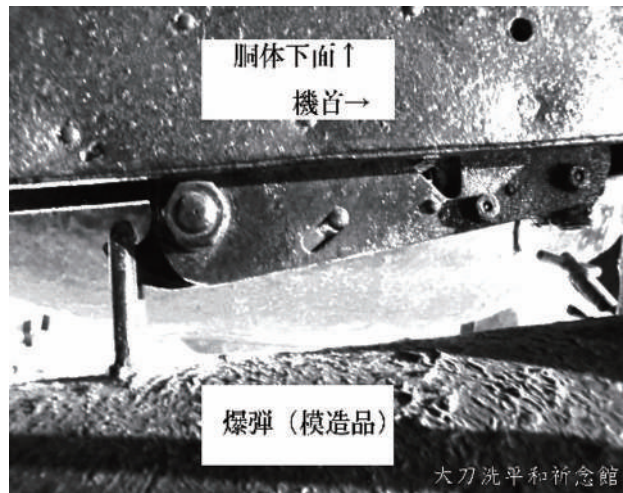
100~250kgの爆弾に使用された  
甲型電磁器（『爆撃教育ノ参考』より）  
適合重量は『と号用爆弾及と号機爆装ノ葉』による

#### 4 おわりに

特攻隊と爆弾—この関係について筆者の文献による調査は未だ途中であり、本論で列挙した少数の事例では、多数を語るには余りに乏しく雑である。

ひと口に「航空特攻」と言っても多様多岐に渡り、簡単に一括りに出来る性質のものではない。

感情論を一切排して見れば、敵上陸の企図破碎等を目的とし、作戦遂行上の一つの



戦法として運用された特攻隊については、捉え方によって感傷的・衝撃的な話として受け止められ、曲解の原因に繋がる事がある。

第三者が語る以上、自己の感情と史実はあくまで分離されるべきで、戦没者に対する慰霊の心は大切にしながらも、誤った先入観を植え付ける事の無いよう、充分留意して特攻史の探求と伝承に努めたいものである。

完

※本稿掲載にあたり、太刀洗平和祈念館様に参考写真の掲載を快諾頂きました。ご協に感謝を申し上げます。

「義烈空挺隊玉砕之地の顕彰碑について」  
「空の神兵」顕彰会会長  
会員 奥本 康大

#### 一、はじめに

歴史は語り継がれなくてはいけない。まして父祖が国を守るために命を賭けて戦った戦争の歴史を、正しくまた永遠に語り継がれなくてはいけない。

約一年前、軍人だった父が遺した手記をもとに「なぜ大東亜戦争は起きたのか？空の神兵と呼ばれた男」（ハート出版）を上梓した。それ以降、多くの団体からの依頼を受けて講演会の講師を務めるようになったが、父祖たちの想いを伝えることが自分の責務と感じるようになっていく。また可能な限り父の足跡を辿り、顕彰と慰霊の旅をすることが自分に課せられた役割と考え、時間の許す限り戦跡巡りをしていく。

昨年、戦史研究グループ仲間と沖繩に慰霊の旅に出掛けた。

主な目的は「義烈空挺隊」が玉砕された北（読谷）飛行場跡に赴き、散華された将兵の慰霊と鎮魂をすることであり、また自分にとっては亡き父が果たせなかつた玉砕の地での慰霊であり、父の名代で行なうことに意義を見出していた。

（義烈空挺隊は父と同じ陸軍落下傘部隊の仲間であったからである。）

現在、義烈空挺隊玉砕之地の碑は沖縄県読谷村役場近くのサトウキビ畑の中に建っている。近くの忠魂碑が目印になるが、探すのに一苦労する場所にある。

傍らには旧陸軍が戦闘機を格納した掩体壕が残っているが、地元住民でも知らない人が多いようだ。今回は隊友会名誉会長の石嶺邦夫さんに義烈空挺隊碑に案内して戴くことが出来た。読谷村における義烈空挺部隊の慰霊碑に対する住民感情等について詳しい説明を受けることが出来た。詳しいことは後述するが、この慰霊碑が粗末な扱いを受けていることに憤りを覚えたのは自分だけではなく全員が同じ思いであった。ある人からの受け売りだが、「英霊を二度死なせてはならない。一度目は肉体の死、二度目は人々から忘れ去られてしまうこと。」国の為に命を賭して戦った英霊を悲しませてはいけないのである。

また、日本人は日教組の戦後教育により自虐史観を植付けられ、軍人や愛国者を蔑視する傾向にある。国とは何か？国家観とは何か？を問い質し、正しい民族の歴史、戦争の歴史を伝えなければならない。  
**二、義烈空挺隊と隊長奥山道郎大尉**  
義烈空挺隊長奥山大尉の軍歴を調べてみた。奥山大尉は落下傘部隊の創成期からの隊員であったが、実戦の場は唯一、沖縄での義烈空挺作戦のみであった。悲運の軍人

ともいえる。

その軍歴を辿ると三重県出身、千葉中学から幼年学校を経て陸軍士官学校に進み（陸士五十三期）、昭和十五年末に創設間もない挺進練習部員（練習部長・河島慶吾中佐）に選抜された。その時に選抜された部員は将校だけの十数名、彼らは落下傘のイロハから研究を始めたのである。奥山大尉は落下傘部隊の草分け的存在であった。陸軍落下傘部隊といえは「空の神兵」と讃えられた。パレンバン奇襲攻撃を思い浮かべ

るが、奥山大尉はパレンバン奇襲作戦には参加されていない。何故なら所属していた挺進第一連隊にパレンバン奇襲攻撃の命令が下り、航路ブノンペンに向かう途中、海南島付近で輸送船が火災事故を起こし、将兵もろとも海に投げ出されたからである。（落下傘、武器弾薬も全て海中に没したとある。）記録では奥山小隊長も南シナ海を暫く漂流され、救助されたのである。（パレンバンには急遽、挺進第二連隊が組織され、父たちの連隊が大勝利をもたらしたのである。挺進第一連隊は不運の連隊であった。）

だが一度だけ檜舞台に立てたことがある。昭和天皇はパレンバンの大勝利を殊更にお喜びになり、落下傘部隊単独の特別演習を観閲されたのである。（昭和十七年七月、於：宇都宮）この栄えある天覧演習におい

て展示降下をしたのが挺進第一連隊だったのである。その後の挺進第一連隊は空挺作戦に投入されることなく、訓練と転進を続けるのである。

正確には作戦の準備に入るが、何らかの理由で中止や延期になっていくのである。サイパン島作戦、レイテ島作戦等に挺進第一連隊の投入が浮上したが、いずれも何らかの理由で中止になったようだ。

昭和十九年秋、奥山大尉は挺進第一連隊第四中隊の中から選抜された百三十六名でなる義烈空挺隊の隊長に任命された。昭和十九年十二月には、フィリッピンのレイテ島には挺進第三連隊、挺進第四連隊で構成された高千穂部隊がレイテ島に落下傘降下するもほぼ全滅。

昭和二十年になると、米軍が沖縄本島に上陸、本土への空襲が激化し、沖縄奪還作戦に投入されたのが奥山大尉率いる義烈空挺隊であり、米軍に奪われた北・中飛行場への攻撃命令が下ったのである。

**三、義烈空挺隊の戦い（陸自第一空挺団資料より抜粋）**

義烈空挺隊への命令は沖縄本島の読谷（北）及び嘉手納（中）にある米軍に奪われた飛行場にある敵航空機及び敵飛行場機能を破壊することであった。



昭和二十年五月二十四日、熊本の健軍飛行場から出撃した挺進第一連隊第四中隊を基幹とする百三十六名と彼らを輸送する第三独立飛行隊の操縦士等三十二名、合計百六十八名が十二機の爆撃機に分乗し沖繩に向かったのである。指揮を執る奥山道郎大尉（出撃時少佐に進級、死後、大佐に特進）は、二十六歳の若さであった。熊本の健軍飛行場で諏訪部大尉\*（五十四期）率いる第三独立飛行隊と合流した「義烈空挺隊」は五月二十三日出撃の予定だったが、天候不良の為一日延期して翌日午後六時十分、遂に健軍飛行場から出撃したのである。隊員は淡緑色の迷彩を施した軍衣に最新兵器と爆薬で身を包み、鬼気迫る姿であった。部隊は無線封鎖で沖繩を目指したが、内四機はエンジン故障（火災？）及び不調の為、九州南部の水田、河原、畑等に不時着（殉職一名）したとの記録にある。他の機体は対空砲火で撃ち落とされ、たった一機（五百四十六番機）のみが強行着陸に成功した。午後十時十一分、健軍飛行場通信基地にたった一文「只今突入」の暗号無線を送信したとある。

昭和二十年五月二十四日、熊本の健軍飛行場から出撃した挺進第一連隊第四中隊を基幹とする百三十六名と彼らを輸送する第三独立飛行隊の操縦士等三十二名、合計百六十八名が十二機の爆撃機に分乗し沖繩に向かったのである。指揮を執る奥山道郎大尉（出撃時少佐に進級、死後、大佐に特進）は、二十六歳の若さであった。熊本の健軍飛行場で諏訪部大尉\*（五十四期）率いる第三独立飛行隊と合流した「義烈空挺隊」は五月二十三日出撃の予定だったが、天候不良の為一日延期して翌日午後六時十分、遂に健軍飛行場から出撃したのである。隊員は淡緑色の迷彩を施した軍衣に最新兵器と爆薬で身を包み、鬼気迫る姿であった。部隊は無線封鎖で沖繩を目指したが、内四機はエンジン故障（火災？）及び不調の為、九州南部の水田、河原、畑等に不時着（殉職一名）したとの記録にある。他の機体は対空砲火で撃ち落とされ、たった一機（五百四十六番機）のみが強行着陸に成功した。午後十時十一分、健軍飛行場通信基地にたった一文「只今突入」の暗号無線を送信したとある。

昭和二十年五月二十四日、熊本の健軍飛行場から出撃した挺進第一連隊第四中隊を基幹とする百三十六名と彼らを輸送する第三独立飛行隊の操縦士等三十二名、合計百六十八名が十二機の爆撃機に分乗し沖繩に向かったのである。指揮を執る奥山道郎大尉（出撃時少佐に進級、死後、大佐に特進）は、二十六歳の若さであった。熊本の健軍飛行場で諏訪部大尉\*（五十四期）率いる第三独立飛行隊と合流した「義烈空挺隊」は五月二十三日出撃の予定だったが、天候不良の為一日延期して翌日午後六時十分、遂に健軍飛行場から出撃したのである。隊員は淡緑色の迷彩を施した軍衣に最新兵器と爆薬で身を包み、鬼気迫る姿であった。部隊は無線封鎖で沖繩を目指したが、内四機はエンジン故障（火災？）及び不調の為、九州南部の水田、河原、畑等に不時着（殉職一名）したとの記録にある。他の機体は対空砲火で撃ち落とされ、たった一機（五百四十六番機）のみが強行着陸に成功した。午後十時十一分、健軍飛行場通信基地にたった一文「只今突入」の暗号無線を送信したとある。

昭和二十年五月二十四日、熊本の健軍飛行場から出撃した挺進第一連隊第四中隊を基幹とする百三十六名と彼らを輸送する第三独立飛行隊の操縦士等三十二名、合計百六十八名が十二機の爆撃機に分乗し沖繩に向かったのである。指揮を執る奥山道郎大尉（出撃時少佐に進級、死後、大佐に特進）は、二十六歳の若さであった。熊本の健軍飛行場で諏訪部大尉\*（五十四期）率いる第三独立飛行隊と合流した「義烈空挺隊」は五月二十三日出撃の予定だったが、天候不良の為一日延期して翌日午後六時十分、遂に健軍飛行場から出撃したのである。隊員は淡緑色の迷彩を施した軍衣に最新兵器と爆薬で身を包み、鬼気迫る姿であった。部隊は無線封鎖で沖繩を目指したが、内四機はエンジン故障（火災？）及び不調の為、九州南部の水田、河原、畑等に不時着（殉職一名）したとの記録にある。他の機体は対空砲火で撃ち落とされ、たった一機（五百四十六番機）のみが強行着陸に成功した。午後十時十一分、健軍飛行場通信基地にたった一文「只今突入」の暗号無線を送信したとある。

昭和二十年五月二十四日、熊本の健軍飛行場から出撃した挺進第一連隊第四中隊を基幹とする百三十六名と彼らを輸送する第三独立飛行隊の操縦士等三十二名、合計百六十八名が十二機の爆撃機に分乗し沖繩に向かったのである。指揮を執る奥山道郎大尉（出撃時少佐に進級、死後、大佐に特進）は、二十六歳の若さであった。熊本の健軍飛行場で諏訪部大尉\*（五十四期）率いる第三独立飛行隊と合流した「義烈空挺隊」は五月二十三日出撃の予定だったが、天候不良の為一日延期して翌日午後六時十分、遂に健軍飛行場から出撃したのである。隊員は淡緑色の迷彩を施した軍衣に最新兵器と爆薬で身を包み、鬼気迫る姿であった。部隊は無線封鎖で沖繩を目指したが、内四機はエンジン故障（火災？）及び不調の為、九州南部の水田、河原、畑等に不時着（殉職一名）したとの記録にある。他の機体は対空砲火で撃ち落とされ、たった一機（五百四十六番機）のみが強行着陸に成功した。午後十時十一分、健軍飛行場通信基地にたった一文「只今突入」の暗号無線を送信したとある。

沖繩戦没者墓苑が平和の礎(いしじ)・黎明之塔、日本各県出身地別の慰霊碑等があり、その一角に義烈空挺隊の慰霊碑もある。(昭和五十一年五月建立)

石嶺さんによると、読谷村役場からは、旧北飛行場の着陸地点の慰霊碑を移動させられた時、慰霊碑はいつでも撤去出来る簡素なものにすることを申し渡されている。

(よって未だに木製の碑となっている)また摩文仁の丘にある義烈慰霊碑があるから読谷村の玉砕之地の碑は不要ではないかとの余計な提言までされているとの事である。しかし慰霊碑とはそんなものではない。ましてご遺族の心中を察すると簡単に玉砕の地から撤去する事など有り得ない話である。石嶺さんの話では、読谷村を訪れる遺族は絶えないとのことである。義烈空挺隊の隊員は独身者が殆どであり、戦後七十二年も経過すれば親、兄弟等の肉親の方は殆ど鬼籍に入られた筈である。しかし今も訪れる人達が絶えないのは、英霊の親族や、また史実を知る一般の多くの人たちが、歴史を風化させない為に、慰霊供養に訪れるのであろう。

こんな人たちの気持ちを逆撫でする動きがあることに憤りさえ感じている。

最近、また新たな動きがあると石嶺さんは付け加えられた。読谷村役場付近には公共施設があり、その中の運動公園の駐車場の

拡張計画が浮上しており、現在の慰霊碑の撤去も打診されているようだ。これが実現すれば、義烈空挺隊玉砕之碑は読谷村から消失することになる。

この話を聞いて、なんとも居た堪れない気持ちに陥ったのは自分だけではなく一緒に慰霊に訪れた仲間全員同じであった。

こんなことが、沖縄県読谷村で進められていることを広く世間の人に知らさなくてはとの衝動に駆られた。

参考までに記すが、旧読谷飛行場の滑走路は現在、村役場への進入道路になっており、その道路の近くの交差点横には公園が二ヶ所あった。公園内には、自虐的な戦争非難の石碑が多数建てられており、沖縄県の抱える反戦感情や国防問題に対する根深さを感じた。(正しい歴史認識ではない気がしている。)

#### 六、恒久的な慰霊碑の建立について

大東亜戦争の史実が風化しつつある現在、正しい史実を後世に伝えなければと考えている。父の遺した手記を基にして書籍(空の神兵と呼ばれた男たち)を出版したことを契機に時間の許す限り、靖國の英霊の慰霊と顕彰をするようになった。また依頼があれば、「空の神兵」についての講演だけでなく大東亜戦争の歴史的背景やエネルギー資源問題を加味した内容での講師を務めている。

目的は、あまりにも自虐的になっている世の中に対して警鐘を促す為である。

父祖たちの正しさを伝え、日本人が自信と誇りを取り戻すことができればと微力ではあるが声をあげている。

今回の沖縄の慰霊の旅で知った義烈空挺隊玉砕之地の碑は撤去させられることは絶対に回避させたい。

また現在の木製の簡単に撤去可能な碑ではなく、恒久的な慰霊碑建立こそが国の為に命を賭して散華された英霊に対し感謝の誠を捧げる方法ではなからうか。

余談だが、義烈空挺隊玉砕之碑についてこんな気持ちを抱いたのは自分たちだけではないらしい。仲間の一人の話では、群馬県の篤志家が石製の碑を建立しようと奔走され、既に完成しており、あとは現地に設置するだけになっている慰霊碑が倉庫に眠っていると聞いた。

何故このような状態になっているかを推察すると、読谷村が土地を提供してくれないことに原因があるように思えてならない。沖縄県は日本で唯一戦場となった県であり、戦争に対する嫌悪感は判らなくないが、国の英霊を慰霊出来ずに、恒久平和が得られる筈はない。正しい歴史認識のもと義烈空挺隊玉砕之地の碑が、堂々と殉難の地に建立されることを願って止まない。以上

台湾出身旧日本陸軍少年飛行兵について(第2回)  
陸軍特別幹部候補生1期生機上通信士

会員 吳 正男

友人、鹿子嶋 昭(少飛十五期)氏より  
昔日受領した資料に基づき省略・記述する。  
ある日の会話

「64戦隊 少飛十一期陸軍軍曹 許崙墩  
(小西長太郎)」

『「只今帰りました。」「行けるか。」  
「はい、行けます。」「蕎麦を食べ。」  
ハイキングか観劇か、茶飯事感覚の会話だが、今だに記憶しているには訳が有る。  
娑婆の話ではない。それも修辞も感情も抜きの、非情な男同士のツーカーの呼吸だった。宮辺(英夫)隊長と小西の両者はそれで十分に了解し満足できた。モンズーンが吹き始め滑走路の横の林にマンゴーの花咲く季節で、ビルマはラングーンのミンガラドン基地での話である。時に昭和19年1月22日。

その四日前に、隊はマンダレーの北方イラワジ川を渡河中の英軍に対し隼で攻撃をかけた。その際、小西は被弾して野外に不時着、未帰還となった。それが今四日ぶりに帰って来たところだが、ここでは別に珍しい話ではない。仲間に不時着歴3回で今尚健在の小向謙治先輩がいる。

戦闘機とは、自在に飛ぶ砲列だが、直前方しか撃てないから超低空に下りると、鴨打ちの感じで八方から撃たれることになる。現在、戦闘機はFXX, 攻撃機はAXXと分科されて、使い方も別々である。ロシアの攻撃機には、鋼板の長い箱にエンジン座席燃料タンクを組み入れて、それに翼と尾翼をつけたものがある。しかし空戦専門の軽戦車には鋼板は一欠けらもなかった。戦闘機の性能は大体エンジンの馬力に比例する。限られた馬力で攻撃力と防御力を如何に割り当てるかで性能と用途が変わるわけだ。ビルマでは相手変われど主変わらずで、終戦まで隼が使われた。所詮ない袖は振れぬ訳で、皺寄せは乗員にまわり、厳しい状況にあった。さもあればあれ120 Km/hで荒地に胴体着陸した衝撃で機体も翼も折れた。コックピットから小西が持ち出したのは計器盤の横に掛けられた神宮のお守りだけだった。三日目にメーカーラ飛行場に着き次の朝戦友が単機で迎えに来た。隼は単座戦闘機だから便乗するには、暗くて狭い胴体の空間に潜り、操縦索をまたいだ姿勢でしゃがんでいる以外には手は無い。基地まで400 Kmの旅をしゃがんで耐えたが、途中何回か機体が錐揉みで墜落している感覚に襲われ、一巻の終わりかと観念したものだ。この空域では何が起きても不思議ではないが、他人の機体の中に閉じ込

められての一蓮托生は御免蒙りたかった。そうこうするうちに着陸。やれやれ一件落着と思いきや。隊はこれからラムレー島へ艦船攻撃に出かけるところであった。そして上記の帰還報告。重い機体で離陸しつつ、見送りにちよつと手を振りながら思った。「帰るのがちよつと早かったかな。」編隊を組み僚機の位置に就くと宮辺隊長こちらをぎよろりと見てにやりと頷いた。此処から先は「曩々も必要ではなかった。」この件について許は次の様に説明した。『地上兵器に撃たれて不時着、主翼はひん曲がり、胴体は折れた。人間なんて偶然と必然とによって生かされているものだと思います。そうこうして4日目に基地に帰り着いたところ、「小西行けるか」「はい、行きます」で、蕎麦を一杯食べて休む間もなくラムレー島(ラングーン北西350 Km)の英艦隊爆撃に向かったものでした。4日も隊を離れて申し訳ないという感覚で、「行け」も「行く」も平常心。良い仲間でした。250 kgの徹甲弾を抱いて、高度4000 mで反転し、火の洗礼を受けてきました。日本には数少ない体験者です。戦隊では、団結と個人的暴走防止もあり、個人のスコアは認めず、撃墜機数はすべて戦隊の成績とされた。個人英雄主義の欧米空軍の考えと違って、張り合いがない。階級が上の者は、空戦が強いとは限らぬ。こ



の世界では、スコアを重視しない方が統率し易いかもしれない。』

\* 許崙墩 略歴

台南一中5年生の、昭和15年秋、中学卒業せず立川の陸軍航空学校に入隊。1年後宇都宮の陸軍飛行学校に入隊。昭和18年、ビルマの飛行第64戦隊に配属。この飛行第64戦隊は有名な加藤隼戦闘隊である。

「エンジンの音轟轟と 隼は征く雲の果て翼に輝く日の丸と 胸に描きし赤鷲の

しるしは吾らが戦闘機」

この歌詩は、東宝映画「加藤隼戦闘隊」の主題歌の1番である。加藤健夫中佐は1942年（昭和17年）5月22日にビルマ上空で戦死、二階級特進で少将となった。その加藤少将が率いた第64戦隊は、前述のように許の属した戦隊であった。この第64戦隊は、シナ事変勃発後間もなくして編成された戦隊であった。加藤少将はその4代目の隊長であった。

太平洋戦争の初期、日本陸軍の「隼」は海軍の「零戦」と同様に、敵機の性能を凌駕していたので、恐れられていた。

昭和20年8月15日、飛行第64戦隊はアンコール・ワット（カンボジア）南方トレンサップ湖畔にあるクラコール飛行場で終戦を迎えた。

かくして嘗て東亜の空を制して輝かしい戦功を立てたこの戦隊の隼戦闘機群は、遂

に歴史の幕を降ろすのであった。爾後、この隊員らは集中営（捕虜収容所）に入れられた。終戦8か月後に第64戦隊唯一の台湾人である許は台湾人の集中営に移され、間もなく数十名の台湾軍人、軍属らと共に日本海軍の小型艦艇に乗って高雄港に帰還した。

戦後間もない時期に「ポツダム少尉」と言う新造語が出現した。これは日本の敗戦によって復員する幹部候補生らが、お情けによって繰り上げて少尉に任官することを目指す。しかし、戦場で終戦を迎えた兵士らは、こういったお情けに預かることは無かったとみえ、許は軍曹のまま復員した。

後日談になるが、許は2003年、複雑な手続き後、未払い分のサラリーと、当時の軍事郵便貯金を政府から受け取った。いや、これは返して貰ったと言うべきか。日本円7万円ほどの小切手を手にして、彼は大いに笑った。

無傷で生きてきたことに大いに感謝した。戦死したら幾ばくなるかなと考えた時、50年来の片想いがいつぺんに醒めて、これで縁が切れて反ってさばさばした気になった。一晩で飲んでしまおうかとも思ったが、もったいない金だからパソコンを買うことにした。しかし、金額は安いパソコン一台の半分にしか相当しなかった。そもそも復

員した許の逆境たるや、グラントゼロそのものであった。彼は名門校「台南一中」を卒業半年前に退校したので卒業証書は貰えず、かつて敵国だった日本陸軍の航空学校の卒業証書は、中華民国台湾省では通用しなくなった。従って、台湾社会でこれから活躍しようとしても履歴や学歴に関する証明は全く無かった。

許が民間航空への端緒を見出したのは、復員した翌年（1947年）のことであった。たまたま某新聞に掲載された滑空機（グライダー）に関する論文を読んだ許は、一条の光明を見出したかのように、早速一読者としての感想文を拙い中国文で綴って新聞社より撰者に回送してもらった。

この感想文には、ベテラン級の飛行士が綴る専門知識の内容ばかりだったので、撰者よりすぐに面談に来ないかと要請された。この撰者とは「北工」（元州立台北工業学校）の簡卓堅校長であった。外省人である簡校長は京都帝大卒業の方だった。当時、一般の台湾人は未だ北京語に疎かったので、二人の面談はいつのまにか日本語に切り換えられた。「北工」には台湾総督府航空課が残した滑空機が数機あって、ベテラン操縦士を必要とした。そこで許は「北工」の教師として採用され、約9年間滑空機の操縦や内燃機関などを教えた。

天空飛翔に無限の愛着と執着をもった許

は滑空機操縦の教師だけでは満足できなかった。飛行士に復活したいがライセンスを持つことは不可欠の条件である。彼はライセンス申請に頭を痛めた。僥倖にして手が有った。松山飛行場に有ったフライイングクラブに高い月謝を払って飛行時間証明書を貰い、やっとライセンス申請まで漕ぎつけた。許の試験官は珍しく民用航空局長・頼遜岩であった。許はビルマ戦線で連合軍の爆撃機や戦闘機と渡り合って、毫も引けを取らなかった腕前だったので、むろん簡単にパスした。

最初に入ったのは松山飛行場を基地にした従業員十名足らずの小規模な農業航空会社であった。この公司以許はセスナ機(Cessna、単発の小型機)を操縦しては、農薬散布、魚群探索、果ては大型のゴミ堆積場上空を飛んで粉状の消毒薬を散布したりした。民国47年(1958年)ころの事であった。許が毎回約700Kgの消毒薬を積んで超低空で散布するが、風の吹き具合によっては、コックピット(操縦席)内に消毒薬の嫌な匂いはおろか、金蠅のたかったゴミの悪臭が付きまとう。イヤハヤえらい勤務であった。

東南アジアを飛び回るのであった。許が入社した当時の主な業務は、小型旅客機などで国内線(台湾島内)を運航するほか、毎朝四時頃旅客機を貨物機に切り換えて、1トン〜3トンのその日の新聞紙を松山飛行場より台南市、高雄市へと運んだ。FaxやEmailや高速道路がまだ無かった時代である。

1960年代になるとグローバルな航空事業の急速な発展に伴って遠東航空の業務も年々上昇し続け、レシプロ機は漸次淘汰されてターボプロップ機そしてジェット機などへと改変されて行つた。新型機をマスターするため、許は同僚らと三度外国でのおの二か月の短期訓練を受けた。ちなみに、許は一生のうちに17機種の飛行機を操縦し、その飛行時間は驚異的な二万三千時間にのぼった。』

### 海上挺進隊・沖縄の戦い

会員 船舶特幹1期生 中溝 二郎

#### 第一戦隊及び基地第一大隊

海上挺進第一戦隊は、各戦隊のトップとして、昭和十九年八月上旬豊島で訓練に入り、九月一日付で宇品で正式編成され、暁(沖繩三三軍編入後は球)第一六七七部隊と称した。

戦隊長は陸士五二期の梅沢裕大尉(十二月に少佐になった)、第一中隊長伊藤達也

少尉、第二中隊長阿部直勝少尉、第三中隊長津村一之少尉(何れも陸士五七期)、副官は大迫忠士中尉で、群長は何れも船舶幹候隊出身の一〇期の見習士官(二十年一月少尉になった)、隊員は特幹一期生であった。

戦隊は八月末隊員の休暇終了後、九月三日に宇品に集結し、五日に鹿兒島港から輸送路鹿兒島に向い、六日に鹿兒島港から輸送船に乗船し、七日出航して十日には沖繩県島尻郡座間味島(ザマミⅡ慶良間列島の中心地)に第一陣として上陸展開し、舟艇を慶良間海峡に面した古座間味海岸に配備した。

ここで十月十日の沖繩大空襲の際に、この島も米艦上機の空襲を受けたが、舟艇と人員には被害はなかった。

しかしその後には襲来した台風で舟艇二、三隻が使用不能となる故障が起きた。

以後第二、第三戦隊も同じ諸島に展開し、十一月二十五日には軍船舶隊長(鈴木少将)の来閲があり、同島の沖合で慶良間駐屯の三三戦隊合同による爆雷投下演習が行なわれた。

なお同島には十二月中旬、第四戦隊も来島し、阿佐部落海岸に駐留していたが、二十年一月上旬に機帆船数隻で任務地宮古島に向け出発した。

翌二十年一月を迎え、元日早々から空襲

があり、更に二十一、二十二日の両日艦上機グラマンF6Fによる空襲を受け、同地区では本島との連絡船や一般資材には被害があったが、この時も戦隊の舟艇、人員には被害は少なかった。

二月に入ってから後記のように基地大隊の主力は、本島防衛戦力として沖繩本島の南部に移動し、このあと勤務中隊（継田大尉以下約一八〇名）、整備中隊（内藤中尉以下約六十名）、通信班約十名、土工要員として朝鮮人軍属の水上勤務第一〇三中隊（中隊長市川中尉以下兵員若干名（二十名との説もある）、軍属約一〇〇名、船舶工兵第二六連隊の第二中隊第一小队（小隊長乳井少尉以下約三十名）が戦隊長の直接指揮下に入ることになり、またこの頃船舶工兵第二六連隊第二中隊の寺師少尉を長とする小隊が、海軍砲揚陸のため大発三隻で沖繩本島から来島中であつたが、その大発が砲揚陸前に米軍機により撃沈され、人員は戦隊長の指揮下に入るようになった。

座間味島では村長以下役場吏員、部落長老、年長村民（但し青年は殆ど出征不在）、婦女子等約八百名が部隊に協力、極めて緊密な関係にあつた。

三月二十三日午後から、慶良間列島近海に接近した米機動部隊から発進した艦上機グラマンF6Fの数十機の編隊による銃撃を受け、村落は大火災となり、舟艇等にも

若干の被害を出すに至つた。

これに先立ち二十三日に、沖繩本島から大町茂大佐（代わつた軍船舶隊長、第一野戦船舶团长）及び三池明少佐（海上挺進第五基地本部隊長兼特設第五連隊長）、鈴木常良少佐（基地第三大隊長）らが来島し、戦隊及び基地隊の配備状況の視察を行なつていたが、なお米軍に上陸の企図ありとは考えなかつたため、視察を続行する目的で、翌二十四日夜明けに一行は二隻のくり舟で阿嘉島に渡つた。

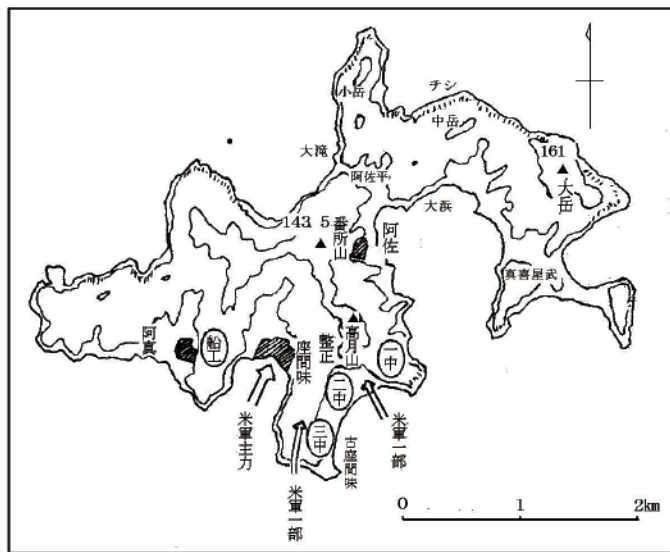
次いで二十四日、二十五日にも艦上機の襲来が一層激しくなり、部落の民家や山野に火災を発生し、二十五日午後からは米艦隊の前哨艦艇からの艦砲射撃を受け始めた。米軍の空襲と続いている艦砲射撃のため第一、第二中隊とも舟艇壕及び爆雷を保管してある弾薬壕は全壊状態となり、殆どの舟艇は焼失し、出撃不能となつた。

敵は座間味を目標にしていると判断、迎撃準備に忙殺される。然し乍ら陸上戦備なく、僅かに基地隊に重機関銃二、軽機関銃、小銃若干、戦隊は大時代の二六年式回転式拳銃と、サーベル式の三十年式乙軍刀のみ。夜、村民は混乱状態。二十二時頃、役場助役等五名が最後の挨拶に来る。

翌二十六日午前九時、米陸軍の第七七師団三〇五連隊第一大隊約三〇〇名が、戦車群とともに主力は座間味部落海岸、及び一

部は舟艇壕のある古座間味海岸から上陸を始めた。

この日部落を準備して応戦していた整備中隊や、船舶工兵小隊は、戦死者が続出し、撤退を余儀なくされたため、米軍はその日の午前中までに座間味部落を中心拠点として、その後方高地である高月山及び付近一帯までを占領し、夕刻までに迫撃砲、重機関銃等も据え、仮設陣地を設けるに至つた。このため戦隊長は、部落及び各秘匿壕から各隊を撤収させ、部落の後方にある番所





山(一四三・五高地)に集結を命じた。

そしてその夜同高地近辺に集結していた戦隊の主力(第三中隊は後記のように集結不能であった)は、各中隊毎に斬込隊となり、中隊長の判断により暗夜を利用して、第一中隊、第二中隊の順に高月山付近と、座間味から阿佐に通ずる主要道路を占拠している米軍機銃陣地に斬込みを決行することとした。

各隊は二十六日夜半に出発し、別々に米軍の各陣地正面に殺到し、機銃掃射の猛攻を受けながらも、中隊長を始めとして群長、

隊員は共々に米軍陣地内にそれぞれ突入し、米兵二十数名を殺傷、重機関銃等を破壊したが、戦隊の損害は甚だ多く、第一中隊長

伊藤少尉、第二中隊長安部少尉を始め、将校の全部と隊員のほとんどが戦死、または負傷のため米軍陣地内で自決する者などで、この一夜で、別途の戦隊本部、第三中隊も含め、隊員の三分の二に当たる六一名(戦死者名簿記載の三月二十六日の戦死者、後日調査の人員とは数名の相違がある)が戦死し、翌日午前四時頃本部に帰り着いた者は数名であった。

(この夜の戦闘について、米軍側の記録は次のようである。

「座間味では第三〇五連隊第一上陸部隊は簡単に上陸できたが、内に進むにつれて手ごわい反撃にあった。

真夜中から翌朝未明にかけて、日本軍は

銃、拳銃、軍刀をもって、海岸近くの米軍陣地にきりこんできた。日本軍の攻撃主力はC中隊を襲い、C中隊も、また機関銃や迫撃砲で九回にわたって応戦し、夜襲の連続で、同じ機関銃を数名が交替しながら打つという激戦をくりかえし、時にはすさまじい白兵戦となったが、結局日本軍は百名以上が戦死し、米軍もまた戦死七、負傷十二名の損害を出した。」「日米最後の戦闘二十一頁〜二十二頁」

一方、第三中隊は、秘匿壕が本隊と離れ古座間味海岸の先端にあつたため、番所山への集結命令が他の中隊より遅れて伝わった。

このため整備隊の一部とともに、砂浜沿いに高月山に向つて潜行中、二十七日午前零時過ぎ同海岸で米軍陣地に遭遇し、中隊はこれを強行突破しようとして、米軍陣地に突入したが、中隊長(津村少尉)及び群長(榎本少尉)及び特幹二名の戦死を出し、なお米軍陣地の守備は固く突破不能と判断されたため、一応元の舟艇壕に引返し、以後約半月に亘り自重して壕内生活を送つた。

戦隊本部は番所山から阿佐部落西方の山地に陣地の移動を余儀なくされ、以後小人数による夜間のみ斬込みを行なう方針をとった。煙を出せば直ちにグラマンが来る、

我が方は昼は隠れ、夜に行動し、戦隊の一、

第二中隊、本部の残員十数名は、二十七日以降も基地勤務中隊を主力として、斬込隊を出したがこれに対応する米軍の処置は、予想したより適切であり、敵は巧妙に電氣的配線でマイク等を設置、その番号位置に接近すると、その位置へ迫撃砲、機銃を射つよう近寄れなくなった。

それでも四月五日には基地隊の内藤中尉以下二十一名がゲリラ隊として出発したが、内藤中尉、基地隊員数名、戦隊員一名が戦死し、本部の間瀬軍曹以下若干の負傷者を出すことになった。

このように、斬込みの効果も少なく、却つてこの間にも被害が続出し、かつ昼間の米軍の攻撃は激しくなる結果となった。

一方前記のように、三月二十六日以後舟艇壕に潜んでいた第三中隊は、小野伍助少尉(幹候一〇期)を中心に、四月八日には眼前の慶良間海峡に碇泊する米船団に対し、独断で舟艇攻撃を行なう方針を決め、七隻の舟艇を泛水しようとしたが、情況が許さず決行し得ずにいる間に、四月十日からの米軍の第二次攻撃に伴う艦砲射撃等によつて、舟艇は全部破壊されるに至った。

このため小野少尉を始め隊員は、一時はもうこれまでと全員の自決も考えたが、衆議の結果止まり、四月十日夜分散して壕から脱出し、阿佐部落後方の戦隊本部に向かっ

たが、再度集合することができず、その後は数人宛の集団となつて個別に行動せざるを得なくなつた。

しかしこの四月十日から始まつた米軍の第二次攻撃は、まず十日に阿佐部落を、次いで十一日には大浜海岸、十三日には真喜屋武(マチャン)方面と、座間味島全域に及び、海上からは艦砲射撃、地上からは迫撃砲による徹底攻撃であつた。

このため戦隊本部及び残存の主力は、更に島の北東部の脊陵地域に移動を余儀なくされ、この間戦隊長は四月十二日、戦闘中、左膝関節に砲弾破片瘡をうけ指揮困難となり、地隙に後退、各隊個別の行動をとらざるを得なくなり、四月二十日に戦隊長から部隊解散の命令が口頭にて伝えられ、組織的な戦闘は終了するに至つた。

こうして島の全域を制圧した米軍は、四月下旬には脊陵台地に対空レーダーと高射砲基地を設置して、艦船の修理補給基地となつた慶良間泊地に突入してくる日本軍の航空機に備え、また一方座間味部落には慶良間方面の司令所を設け、近隣の阿嘉、慶留間、屋嘉比等への攻撃基地及び近隣の島からの収容者の仮設収容所とした。

このような設備を設置するためには、是非とも此の島を完全に制圧する必要があると思われ。此処に配備されていた第一戦隊はこの意味で悲劇の戦隊であつたとも

言える。

こうした状態に追いこまれた戦隊は、六月に入つてからは戦隊員及び基地隊員等に、漸次戦没者や自決者、投降者が出るようになり、全く戦闘は終息状態となつた。

七月下旬、最後に生存していた戦隊員は島の西北端に潜んで、度重なる米軍の投降勧告を無視していた。しかし七月二十四日突如米軍の奇襲を受け、一名(西川伍長)が敵の手榴弾により戦死、尚無視を続けるならば翌日総攻撃をすると警告を受け、やむなく近傍にいた船舶工兵の数名と共に特幹三名が翌日投降した。

この時二名の特幹(高橋文雄、砂川勝美)は投降せず島の西北岸の岩山に終戦後一年以上も潜んで頑張り続け、二十一年十月末に投降した。

又特幹一名(清野 正夫)はチシ海岸付近に潜伏していたが、四月二十日の部隊解散の命を知り、又、四月二十九日(天長節)を期して友軍の反撃があるものと期待していたがこれもなかつたため、島を脱出して日本軍の健在な処にて再起を期すべく、同行していた戦隊付き下士官瀬軍曹と計らい、基地大隊の下士官、兵五名と共に四月二十九日夜、筏により島を脱出した。然し米海軍艇に発見され、銃撃を受けて筏は全壊、間瀬軍曹以下五名は海上戦死、清野伍長と兵一名は辛うじて座間味島西南の屋嘉

比島に泳ぎ着き、島民の保護を得て此処に潜伏、終戦を迎えた。

こうした戦闘情況のため、同戦隊の被害は、戦死者、将校十三名、隊員五十六名の計六十九名で、他に戦隊付下士官一名の戦死があつた。又、この戦闘には島の防衛隊員(男子十六才以上四十五才)及び女子青年団員も参加し多数の死傷者を出した。

海上挺進基地第一大隊は、十九年八月二十八日広島で隊の編成を終り、暁(後に戦隊と同じく球に変わる)第一六七八八部隊と略称し、大隊長は小沢義広少佐(少尉候補者一二期で、後に中佐に進む)であつた。

九月二日に宇品を出航して同日付で第三二軍の指揮下に入り、同月の十日には座間味島に上陸し、同地で宿舍施設の構築や、舟艇秘匿壕の掘穿などの基地設定作業を行なつていた。

昭和二十年に入ると、沖縄本島にいた武部隊(第九師団)の台湾転出に伴う、軍からの隊の改編命令に基づき、二月十八日に勤務中隊のうちの一コ中隊(中隊長は継田八重治大尉で、約一八〇名)と、整備中隊(中隊長は内藤四郎中尉で、人員約六十名)及び通信班を残し、大隊の主力約七〇〇名は独立歩兵第一大隊として、沖縄本島島尻地区の守備兵力として転用されることとなつて移動し、その補充として朝鮮人軍夫による水上勤務中隊(長は市川武雄中尉)の約

一〇〇名の二コ小隊が、泛水作業のため渡島してきたが、これはその監督に当たる下士官、兵若干名のほかは、全く武器を持たない隊であったので、陸上戦闘には無力であった。

これらの基地中隊、整備中隊、通信隊は、二月中旬以降は戦隊長の指揮下に入り、前記のように三月二十六日から上陸してきた米軍と、座間味部落を中心に直接戦闘を行ない、米軍の占領地点に対して果敢に斬込攻撃を行なったが、損害も続出し四月中旬には第二次攻撃を受けてほとんど潰滅した。



この間には戦隊付下士官瀬軍曹を隊長とする斬込隊と、整備中隊長内藤中尉（四月五日戦死）の斬込隊は、番所山及び座間味部落内の米軍陣地に対し攻撃を行い、効果も挙げ米軍を脅かしたが、それに伴って戦死者も続出し、勤務中隊、整備中隊とも将校のほとんどが戦死した。

沖繩本島に配備された本隊は、爾後米軍の上陸した四月一日から同月の末までの間、山（二四師団）の七四部隊に配属され、同師団の守備範囲のうち北地区の防備担当とされており、主として小緑の海岸地区の警備に当たっていたが、同月の中旬に第二中隊（中隊長田中少尉）は、迫撃第三大隊に配属され、繁田川方面に向って進出したが、この頃は大隊の主力は、まだ小緑地区に残っていた。

五月に入り、月始めに大隊主力は平賀部隊（特設第六連隊、海上挺進戦隊の出撃したあとの基地関係部隊を集めたもの）に配置されていたが、その上旬に更に独立混成第四四旅団（球兵团）に転属替えとなり、同旅団中の独立混成第二五連隊（美田部隊）に配属され、豊見城（トミグスク）に陣地を移動した。

更に五月中旬に至るとその一中隊は、第二三連隊第三大隊に編入され、他の中隊も首里と那覇を結ぶ戦線中の第一線陣地である前田部落五十一・七高地に進出して戦闘

を行なうよう命令を受け、進攻してくる米軍の戦車及び歩兵隊との間に、数日にわたって激戦を展開し、ここで各中隊とも戦力の大半を失うに至った。

この後、軍の南部への転進作戦命令に基づき、同地を撤収して五月二十七日に沖繩本島南端に近い島尻郡仲座に撤退を行ない、以後同地区に点在して守備態勢をとっていたが、六月十日頃になると、逐次南下してくる米軍は進撃の度を早め、同地区近辺の日本軍の守備陣地はいたるところで寸断され、同大隊も小沢部隊長が戦死し、将校のほとんどが失われたため、残存者は寄るべき指揮系統もなくなり、また兵器、食糧に欠乏し、六月十二日を以って部隊組織としては消滅の状態になり、以後三々五々、適宜に他の部隊の残員と行動をとるようになるに至っていた。

こうした戦闘経過により、基地大隊としての戦死者は、総員八九二名中、戦闘により沖繩本島及び座間味島（約一〇〇名戦死）を合わせて六二〇名と、米軍上陸前に五〇名の戦死者もあり、生還した者は一七四名で、他隊への転属者四三名があった。

なお戦隊長の指揮下にあった船舶工兵第二六連隊の所属小隊は、座間味島で乳井少尉、寺師少尉等幹部を始め三三名が戦死し、特設水上勤務隊の軍人では市川中尉以下一五名が同島で戦死した。



まるでジェットコースター



沼津駅から出る伊豆箱根バスに乗り、多比バス停で降りる。午前9時30分、大平山登山口の標識を見て登山道に入り、両側がみかん畑となっている急坂を登っていく。

連載山ある記3 静岡県「沼津アルプス」

会員 池田 康博



小鷲頭山から望む駿河湾と富士山

多比口峠に出ると、右に折れて山頂に向かう。急登ではあるが低山、約1時間で山頂に着いた。いよいよ縦走のスタートである。来た道を返し、さらに多比峠まで進んで鷲頭山に向かうが、ここから横山までの5山が、激しく登って激しく下る、まるでジェットコースターのような登山道である。百日前後のアップダウンを繰り返しながら最後の香貫山山頂に着いたのは既に午後3時、時間もかかったが、急な登り降りに加えてヤセ尾根もある、アルプスの名に恥

じない？コースではあった。コース上には、小鷲頭山を下った所に「中将宮」という祠があった。一之谷の合戦で生け捕られた平重衡が、伊豆狩野の里に軟禁中のところ、逃走を企てたが果たせず自害した場所という。傍には、大正天皇の「お手植えの松」跡もある。山のすぐ下に沼津の御用邸があったからであろう。また、徳倉山には、大東亜戦争末期に設けられた対空防御用の機関銃座跡があった。駿河湾上空へ飛来する敵機を攻撃したのであろうか。各山頂からの展望は良くないが、歴史に思いをはせるコースでもあった。



広報の部屋

演劇公演のご案内

〜藤田理事長推薦〜

公演名

特攻隊ミュージカル

『流れる雲よ〜未来より愛をこめて〜』

東京公演

期間：八月十五日(水)〜十九日(日)

劇場：(一社)六行会ホール

東京都品川区北2-32-2

名古屋公演

期間：八月十一日(土)〜十二日(日)

劇場：港文化小劇場

大阪公演

期間：八月二十四日(金)〜二十六(日)

劇場：朝日生命ホール

公演情報：www.djdi.co.jp/at/

チケット

問合せ：ateliiede.ticket@gmail.com

問合せ先

演劇集団アトリエッジ/株サンディ

電話：〇三ー三三三七七ー〇一九六

メール at@djdi.co.jp

「埼玉県特攻勇士之像慰霊祭」のご案内

日時 平成30年10月31日水曜11時〜14時

場所 埼玉県護国神社境内

さいたま市大宮区高鼻町3-149

最寄駅 北大宮駅から徒歩約5分

行事

慰霊祭「特攻勇士之像」前

直会 社務所二階

玉串料 2千円

その他

受付は十時半より行います。

直会準備の関係上、参列希望の方は10月

20日までに事務局にFAX、又はメール

にてお願い致します。

連絡先

顕彰会事務局

FAX 〇三ー五二二一三ー四五九六

メール tokuseniken@tokkotai.or.jp

「世田谷山観音寺月例法要」のご案内

毎月、戦没特攻隊員に対する感謝と慰霊

の法要を行っています。

どなたでもご参加できます。

日時 毎月18日午後2時より

場所 世田谷山観音寺

〒154-0002

東京都世田谷区下馬4-9-4

TEL 03-3410-8811

FAX 03-3410-8812

内容 1 特攻観音堂に於ける法要

2 本坊に於ける直会

その他 御宝前(お布施)として千円御

収め下さい。

「終戦記念日特別展」のご案内

日時 平成30年8月14・15日

午前9時〜午後5時

場所 仙台市青葉城址「本丸会館」2階

観覧無料

主催 東北昭和史談会

協賛 宮城県護国神社



主催：東北昭和史談会 協賛：宮城県護国神社 平和ミュージアム日本陸海軍博物館



## 特攻文芸

### 俳句

●夏の夜帰りし君は姿かえ  
淳

詠み人知らず

●アジサイの色を横目に

ノウゼンカズラ

●夏空に一すじ伸びる飛行雲

### 川柳

井下駄マスオ

●夏の朝目覚まし時計蟬の声

●薦められ変えて忘れるパスワード

●海開きビキニ眺めてかき氷

●又一句頼むと言われ汗が出る  
ネコ

### 短歌

●特攻兵の望みの花の枝持ちて

駆けつけ来れば機は飛び立ちぬ

安田 郁子

\*この歌の背景記事を次頁に掲載しています

「特攻先輩への陳謝」会員（#92754）渡辺 一民

●拉致たみも 救えぬ国になりたれば

如何に詫びるや 特攻の士に

淳子

●征きますと 別れし人のぬくもりを

語りし人の 想いせつなき

●今生に 輪廻転生あるならば

再び出でよ 若桜たち





※文芸欄に掲載の安田郁子様の短歌の背景  
について 専務理事 衣笠陽雄

この短歌の背景は、安田様の著書「モスグリーンの青春」に掲載されていますのでここに抜粋し、紹介致します。この本は安田様が実際に特攻隊員達と接した事実を取り纏めてあり、とても読み易く、特攻隊員の一面を知るうえでも良き資料ともなりますので是非ご一読を勧め致します。

\*\*\*\*\*  
少年兵群像

（「モスグリーンの青春」5の章『深く心に刻まれた特攻隊の出撃』から）

それは、まだ桜の咲く前の事でした。例のようにテルちゃんやふたりで青写真を焼いていると、突然、長身の飛行服の兵が来て、「いつも見てるよ、あそこから」と兵舎の見張り台を指さすのです。ふたりともこの不良とは口をきかないという目くばせをしていました。行ってしまおうと「あきれたわね。空の見張りなのに。また何と言つて隊から出てきたのかしら」と、その要領の良い、丸顔で目が笑うと鉤になる、どこか憎めない飛行兵の事を批評しました。それからしばらくして、例の兵士がにこのこと事務所にやってきましたが、私たちに用のあるはずもないので、わざと目をそらしていた瞬間でした。いきなり私の右頬を

痛いくらいつついたのです。「あっ」と思う早業で、彼は走り去り、振り返ると、手を挙げて引き揚げていくのです。やられたと思いましたが。私の小さなプライドが傷つきましたが、あとになって考えてみると、彼もまた特攻隊員として出撃して征ったのではないかと思うのです。毎日見張り当番をしながら見ていた女の子。「きょうはさわつて来るよ」と戦友に告げて来たのでしようか。

四月二十日頃、出勤すると、事務所の広い庭の東側に忽然と三角兵舎が出来ていました。目を疑いたいような思いと、「来た、いよいよ」という気持ち湧きあがってくるのが同時でした。火急に間に合わせるの、字の通り中央に柱があり、左右から板を合わせてあるのですぐに移動も出来ました。通路は土のまま、寝るために膝ほどの高さに板が渡してあります。特攻隊員の宿舎だとすぐわかりました。何か息詰まるような空気が流れていました。午前中であつたと思います。仕事をしながら顔をあげるのと、その三角兵舎の中から出てきたのでしようか、十二名くらいが一列に並ぶと二組に分かれ、事務所の庭でバレーボールがはじまったのが見えました。今まで見たことのない十七歳ぐらいの少年兵です。個人差はありますが、二十歳と十七歳ではその表情にもずいぶん違いがありました。二十歳の

兵隊は三年間の訓練を經ているということが何となく感じられ、二十三歳ぐらいの方になると死生観がしつかりと身についておられるのを感じました。それに比べると十七歳という年齢の少年兵はほんとうにあどけない表情をしておりました。

「出撃するらしい」という誰かの声からしては、白いマフラーを巻き、飛行服を着たままの姿で、ボールに興じています。静かにはじまったバレーボールも次第に興が乗ったようで、いつもの若々しい声も聞こえるようになったようです。その数分後、「ピーン」と笛がなりました。私たちにはよく聞き取れませんが、身のまわりを整えるよう、何分後には出撃集合、ということのようです。隊員はみんな一斉に部屋に入りました。私たちは身のすくむ思いでした。

「見て、見て」という友人の声に窓の外を見ると、一人だけ部屋に入らずに、左手にある小川の岸に向かって走って行きます。その津和田川の右手は藪になっていて誰もいないところです。小川の面に急に夕立の様な波紋がいくつもいくつもできました。滂沱と流れ落ちる涙が輪をつくっていました。あとは私も見ませんでした。見てはいけないと思いました。

小川で顔を洗ったのか、色白のふっくらした頬が赤くはれているようでした。本当に

まだ少年でした。そうして自分との決別を済ませたのか、出撃前でもみんな整列して飛行場まで駆け足です。むごい、むごい。もう居ても立ってもいられなくなった私は、テルちゃんのお父さんの自転車を借りて、特攻兵の翳していききたいという桜の枝を取りに出掛けました。今朝、最後に咲く青い桜の八重咲きを見てきたのは恒久というところでした。その家にも人もいないようなので、石垣のところのごみ箱を踏み台にして三枝ほど折りました。とても間に合わないと思いつつながら、そうでもしなくてはならなかったのです。道は砂利道で、しかも空襲で穴があいている所をふさいでいるため砂利の山ができています。自転車もろともひっくり返り、桜の花も散らせてしまいました。膝を痛めて、血が白く乾いた砂利の上に点々と落ちました。見上げる空にはもう海に向かう六機ほどの機影が見えます。何ひとつ役に立てず、あの小年兵のことを思い、見渡すかぎり猫の子一匹いないのを幸いに大声で泣きました。「ワアワア」と子供のように声を上げて泣いたことでいくらか気も落ち着き、自転車を引いて事務所に帰ると、三角兵舎の前には祭壇が作られ、白木の箱が並んでいました。無気力になっていた私は、そのことに反発する力もなく、そこにほとんど散って

しまった桜の枝をお供えしました。

特攻兵の望みの花の枝持らて駆けつけ  
来れば機は飛び立ちぬ

寄付者御芳名(敬称略)

(平成30年4月1日〜6月30日)

(単位千円)

事務局からの報告等

この歌は、後日、回想として特攻慰霊顕彰碑に捧げた私の二十歳の歌です。  
空襲の激しい日、壕の奥に入ると、無線室からついさきほど出撃したばかりの特攻兵の最後の通信、「ツー」「ツー」「ツー」

「ツ」という、通信音と「〇号機、我突入」と解読された声が聞こえます。最後の十五秒程の長音が切れた時が命が切れた時なのです。続々と耳に届く「我突入」という言葉と共に胸を抉られるような悲壮な通信が今も聞こえるようです。夢にも出てくるし本当に堪らない体験でした。



若き特攻隊員  
陸士61期 故松本武仁氏画

北海道	二〇〇	千	玄室	一〇〇	呉	奈々子
埼玉	一〇	粕井	隆	一〇	三浦	雅夫
東京	七	森山	正義	七	武谷	孝生
林	七	中島	尚史	七	幸野	聖子
宮下	三	平田	重夫	三	水気	博美
久代	二	早瀬	登	二	服部	武志
秀一	二	藤田	通寛	二	杉原	清之
昌久	二	小泉	朋美	二	安藤	愿英
昌久	一	平川	善人	一	高瀬	宏司
恭祐		田中	育子			
潤						
高宗						
亨						
株タイユウ・サービス						
小池						
典子						
池田						
高雄						
林						
良美						
神奈川						
神奈川						
林						
良美						

新入会員名簿(敬称略)  
(平成30年4月1日〜6月30日)

愛媛	兵庫	神奈川	東京	千葉	埼玉	茨城	岩手	鹿児島	宮崎	広島	大阪	武藤 健司													
高木 弘	俊成キクノ	中塚 奈央	脇 保	木下 保	細川 昭夫	滝山 和	梅田 俊幸	渋谷 鋭市	明圓 昭二	島田 節子	澤部 泰	及川 昭男	川越 賢二	鈴木 厚郎	山崎 勲一郎	村永 浩太郎	杉田 健司	末光 明子	齊藤 美香	長谷場 誠	西村 眞悟	花里 淳一	小坂 宜雄	新井 勲	
(30)	(29)	(29)	(29)	(29)	(29)	(30)	(30)	(28)	(30)	(28)	(30)	(30)	(28)	(30)	(28)	(30)	(28)	(30)	(28)	(30)	(28)	(30)	(28)	(30)	(28)
(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	

会員訂報(敬称略)

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」  
 当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方なら、なたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰(他団体への参加を含む)
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <http://www.tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛として下さい。  
〒102-0073  
東京都千代田区九段北3-1-1  
靖国神社遊就館内  
公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
電話 03-5213-4594  
FAX 03-5213-4596  
E-mail tokuseniken@tokkotai.or.jp